

越中国府関連遺跡調査概報VI

— 平成3年度、高岡市下水道古府串岡枝線地区の調査 —

1994年3月

高岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、高岡市下水道古府串岡枝線工事に伴う、越中国府関連遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 当調査は、高岡市都市整備部下水道建設課の委託を受けて高岡市教育委員会が実施した。
3. 調査地区は、高岡市伏木古府2丁目7番である。
4. 現地調査期間は、平成3年9月2日から同年10月4日までである。
5. 報告書作成は、平成5年度の事業として実施した。
6. 付載として、昭和60年度に実施した勝興寺の避雷針設置に伴う越中国府関連遺跡発掘調査の結果を報告した。なお当地区は「勝興寺避雷針地区」乃至「勝興寺地区」と称する。
7. 調査関係者は、次のとおりである。

社会教育課長；佐野嘉朗（平成3年度）

社会教育課長；野村一郎（平成5年度）

課長補佐；鹿島誠一（平成5年度）

文化係長；大石茂

係員；山口辰一

係員；樋木和代（平成5年度）

8. 本書における遺構記号は、次のとおりである。

S A - 標址, S B - 建物址, S D - 溝, S K - 土坑

9. 現地調査及び報告書作成において、以下の各氏より御教示・御援助を得た。

（順不同・敬称略）

赤井 博（若草自治会長）

土山照慎（勝興寺住職）

中谷 賢（地元）

西井龍儀（富山考古学会）

宮田進一（富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所）

10. 本書の執筆は、山口が担当した。

調査参加者名簿

発掘 稲場由美子、岡島敏雄、小林茂、高田えみ子、前田武國、松井弘子、
水外一郎、宮下真知子

整理 稲場由美子、大谷知可子、岡田幸子、坂林泰子、杉本光映、
高田えみ子、寺井久子、道谷美奈子、中島和美、橋真理子、三島幸代

目 次

例一 言

目一 次

I 序 説	1
II 遺 構	5
1. 種址	5
2. 土坑	5
3. 溝	9
III 遺 物	10
1. 土器	10
2. 瓦	13
3. その他の遺物	14
IV 結 語	15
V 付 載	18

昭和60年度勝興寺遺跡針地区の調査

図面目次

- 図面1 遺物実測図 土器
- 図面2 遺物実測図 土器
- 図面3 遺物実測図 土器
- 図面4 遺物実測図 土器
- 図面5 遺物実測図 土器
- 図面6 遺物実測図 土器
- 図面7 遺物実測図 土器
- 図面8 遺物実測図 瓦
- 図面9 遺物実測図 瓦
- 図面10 遺物実測図 土製品・石製品

図版目次

- 図版1 遺構 1. 全景(南)
2. 全景(北)
- 図版2 遺構 1. 北側地区全景(北)
2. 南側地区全景(北)
- 図版3 遺構 1. S A01全景(南東)
2. S A01全景(南)
- 図版4 遺構 1. S A03全景(南)
2. S A03全景(北)
- 図版5 遺構 1. S K02遺物出土状態全景(南西)
2. S K02遺物出土状態全景(東)
- 図版6 遺構 1. S K02遺物出土状態近景(南)
2. S K02遺物出土状態近景(西)
3. S K02遺物出土状態近景(東)
- 図版7 遺構 1. S K02掘り上げ状態全景(南)
2. S K02掘り上げ状態全景(東)

- 図版8 遺構 1. S D01全景（南東）
2. S D01遺物出土状態近景（南東）
- 図版9 遺構 1. S D03遺物出土状態近景（北西）
2. S D03遺物出土状態近景（西）
- 図版10 遺構 1. S D04~07全景（南西）
2. S D05土層断面（西）
- 図版11 遺構 1. S D01付近調査風景（南東）
2. S D05調査風景（南西）
- 図版12 遺構 1. 勝興寺地区北側試掘坑全景（南）
2. 勝興寺地区北側試掘坑全景（西）
- 図版13 遺構 1. 勝興寺地区南側試掘坑全景（北）
2. 勝興寺地区南側試掘坑全景（南）
- 図版14 遺物 上器
- 図版15 遺物 土器
- 図版16 遺物 1. 軒平瓦（御亭角タイプ）
2. 丸瓦（御亭角タイプ）
3. 平瓦（御亭角タイプ）
- 図版17 遺物 1. 平瓦凹面（御亭角タイプ）
2. 平瓦凸面（御亭角タイプ）
- 図版18 遺物 1. 平瓦凹面（国分寺タイプ）
2. 平瓦凸面（国分寺タイプ）
- 図版19 遺物 1. 土鍤
2. 砥石
- 図版20 遺物 1. 勝興寺地区土師器・須恵器
2. 勝興寺地区志野（内面）
3. 勝興寺地区志野（外面）

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/5万)	1
第2図 調査地区位置図 (1/5,000)	2
第3図 造構全体図 (1/400)	4
第4図 北側遺構図 (1/200)	6
第5図 南側遺構図 (1/200)	7
第6図 S K02実測図 (1/20)	8
第7図 勝興寺地区造構図 (1/200)	18
第8図 勝興寺地区土器類実測図 (1/3)	19

I 序 説

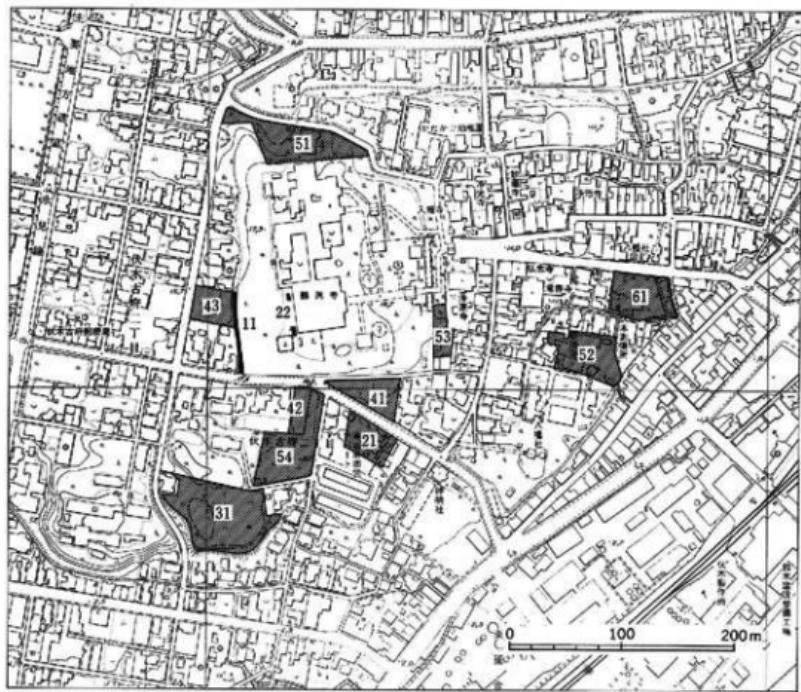
遺跡概覽

越中国府関連遺跡は、高岡市街地の北側、富山湾へと注ぐ小矢部川の河口左岸の伏木台地に位置している。伏木台地は南北2.15km、東西1.75kmの規模で、上位と下位との2つの段丘から構成されている。この台地全体が遺跡地帯（埋蔵文化財包蔵地）と判断している。

この越中国府関連遺跡と総称している遺跡は、越中国庁跡推定地、県指定史跡越中国分寺跡、越中国分尼寺跡想定地を中心に、これに関連する施設や集落遺跡を含むものである。また国府以前の古墳群や寺院跡、以後の城郭跡等も当地内に所在している。



第1図 遺跡位置図(1/5万)



第2図 調査地区位置図 (1/5,000)

- 11. 平成3年度調査地区（高岡市下水道古府申岡枝線地区）
- 21. 昭和60年度調査地区（古府宿舎地区），22. 昭和60年度調査地区（勝興寺避雷針地区）
- 31. 昭和61年度調査地区（御亭角地区），41-43. 昭和62年度調査地区（勝興寺周辺地区）
- 51-54. 昭和63年度調査地区（勝興寺周辺地区），61. 平成2年度調査地区（伏木測候所地区）

越中国序は、下位段丘の中央部分に存在していたものと推定されている。現在浄土真宗本願寺派の大寺院「勝興寺」の境内地となっているところである。

越中国分寺跡は、下位段丘の北部に比定されている。国序跡推定地の北西約600mの地点である。現在、真言宗の寺となっている国分寺の境内地を中心に寺域が想定されている。またこの境内地約1,538m²が越中国分寺跡として県の指定史跡になっている。

越中国分尼寺跡については、諸国の実例から国序跡や国分寺跡の周辺に所在していたとする見解が中心である。具体的場所については、幾つかの瓦採集地をあげる説がある。

越中国府関連遺跡の発掘調査

越中国府関連遺跡の発掘調査については、戦前におけるものとして昭和11年に実施された国分寺跡の調査がまず挙げられる。これは堀井三友氏によるものである。次に戦後におけるものとして昭和41年に実施された国分寺の境内地と国庁跡推定地の南側地区での調査がある。

近年に至り、高岡市教育委員会による調査が実施されている。これは昭和60年度より断続的に実施している開発行為に伴うものと、昭和61年度から平成2年度の5箇年に亘り実施した遺跡確認調査である。国庁跡推定地付近におけるこれらの調査については、第2図に示しておいた。なお昭和41年の調査地区は、第2図の31・42・54が該当する。

調査に至る経緯

平成3年8月20日、越中国庁跡推定地の「勝興寺」境内の裏側（南西側）で下水道の建設工事計画がある事が知らされた。これは市都市整備部下水道建設課による「古府串岡枝線」工事であり、すでに工事の実施が決定されていた。

当教育委員会は、昭和62年度に「越中国府関連遺跡発掘調査事業」の一環として今回の工事地区隣接地で試掘調査を実施し（第2図の43の地点）、当地が谷部に該当し、遺構が検出されず、遺物も出土しない所であることを確認していた。工事の実施が決定されていたこともあり、工事のための重機による掘削は予定通り実施してもらうこととし、この時社会教育課の職員が立会い、遺構が検出されたり遺物が出土した場合は工事を一時中断して、発掘調査を実施することで協議が成立した。

工事は8月24日㈯に開始されたが、週末にかかったことと連絡の不備のため、8月26日に現地に赴き、遺構の検出と遺物の出土を確認した。このため工事を一時中断して発掘調査を実施することになった。

調査地区

今回の調査地区は幅員3~4mで、南北に延びる道路部分である。この道路は以前、勝興寺の南西側から北西側へこの寺の裏側を通り抜ける小道で、付近に椿の木が多くあったので椿道と呼ばれていた。現在は南西側から北側へ約70m進んだ所で行き止まりとなっている。

下水道工事は、この道路下へ下水管を埋設するものである。工事は幅約1mの掘削であるが、発掘調査のため、歩行可能な部分を残した以外を掘削した。すなわち発掘地区は幅約1.5~2.5mで、長さ約70mとなった。

調査の経過

発掘調査は9月2日から開始した。表土は重機により掘削してダンプカーに積載して場外へ搬出した。その後遺構の確認や掘り下げを実施した。そして写真撮影や遺構の実測を行って、10月4日に現地調査が終了した。実働調査日は19日間である。

遺構・遺物は調査地区的南側に多く、北側は少なかった。北側は工事により調査以前に一部掘削を受けたが、結果的には一部の遺構の破壊で止まった。

調査面積

発掘調査面積は120m²となった。

検出遺構

検出遺構は以下のとおりである。

櫛址 3 条 (S A01~03)

土坑 2 基 (S K01~02)

溝 7 条 (S D01~07)

またこれら以外に多数のピットが検出されて
いる。遺構番号は当地区のみのものである。

出土遺物

出土遺物は、奈良平安時代のもので、中近世
のものが極少量出土している。

種類別には以下のとおりである。

1. 土器類；土師器、須恵器、白磁、中近世
の陶磁器
2. 瓦類；軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦
3. 土製品；土錐
4. 石製品；砥石

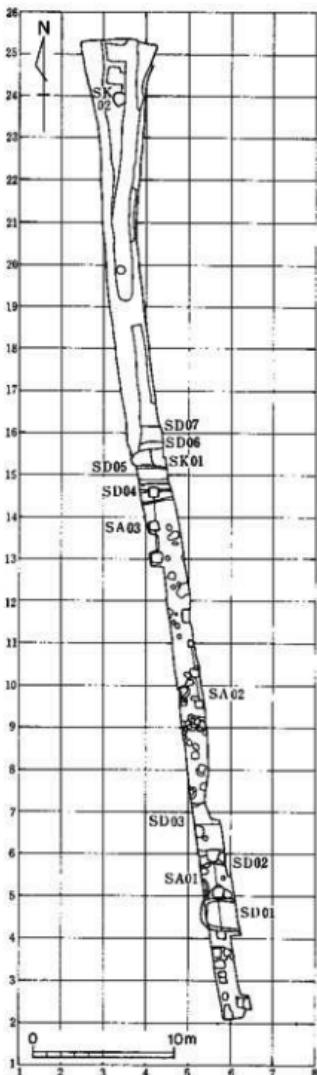
グリッド

調査地区的グリッドは、平面直角座標系に合
わせた。第3図における、X = 1, Y = 1 の地
点は、原点より、西へ9,983 m, 北へ87,509 m
の位置である。

第3～5図の遺構図の方眼（一つのグリッド
の単位）は3 m間隔である。

レベル

遺構確認面すなわち基盤層上面でのレベルは、
中央部で17.06 m, 南側で17.4 mである。



第3図 遺構全体図 (1/400)

II 遺構

1. 棚 址

S A 01

南北に延びる棚址である。調査地区の南側（5, 4～6）区で検出された。規模は2間（5.7m）である。方位は真北に対し6度西に偏っている。掘り方は方形である。規模はやや不揃いで、北側と中央の掘り方が一辺80cmであるのに対して、南側のものは55cmと小さくなる。北側の掘り方がS D02と一部重複し、中央と南側の掘り方がS D01と僅かに重複するが、新旧は不明である。出土遺物は、土師器、須恵器である。

S A 02

南北に延びる棚址である。調査地区の中央南寄り（5, 9～11）区で検出された。規模は2間（4.2m）である。方位は真北に対し7.5度西に偏っている。掘り方は方形である。規模は一辺50～60cmである。中央と南側の掘り方は小ピットに切られている。北側延長上にさらに一つ掘り方が存在するが、傾きや規模が異なり、別のものと判断した。出土遺物は、土師器、須恵器である。

S A 03

南北に延びる棚址である。調査地区の中央部（4, 12～14）区で検出された。規模は3間（4.8m）以上である。方位は真北に対し2度西に偏っている。掘り方は方形である。一辺70～80cm、深さ26～38cmである。北側の掘り方はS D04と重複し、この溝に切られている。この遺構の南側への拡がりについては、調査地区外となり不明である。当初の掘削の後、北側と中央の掘り方が検出されたので、その延長上に推定される部分を拡張して、南側の掘り方を確認した。出土遺物は、土師器、須恵器である。

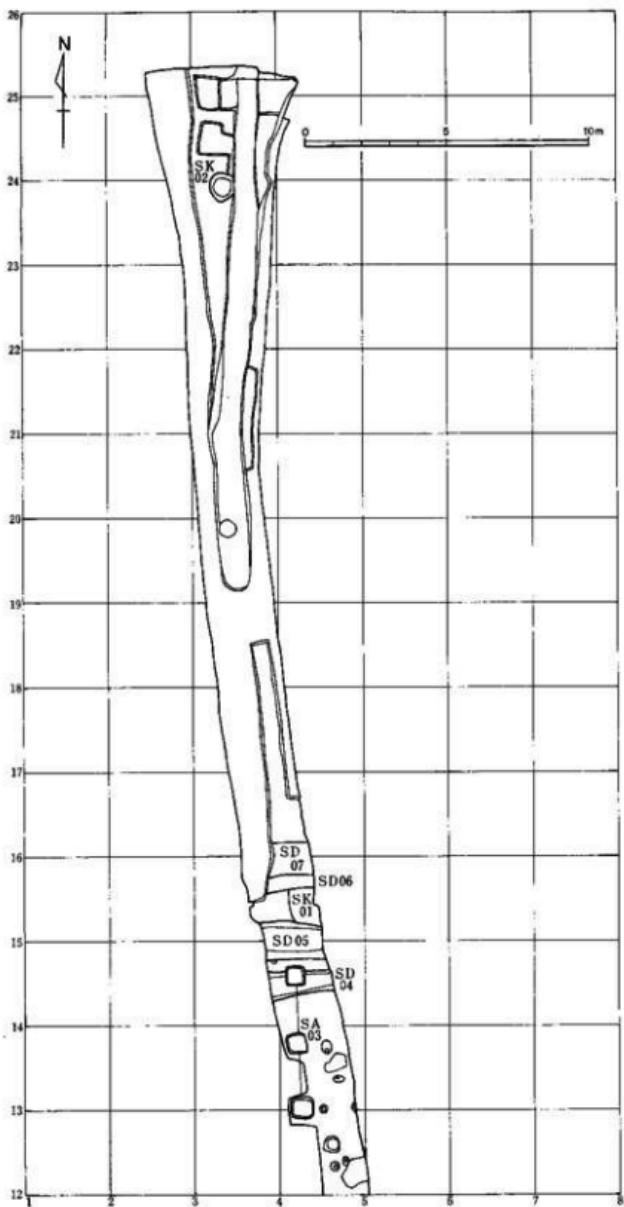
2. 土 坑

S K 01

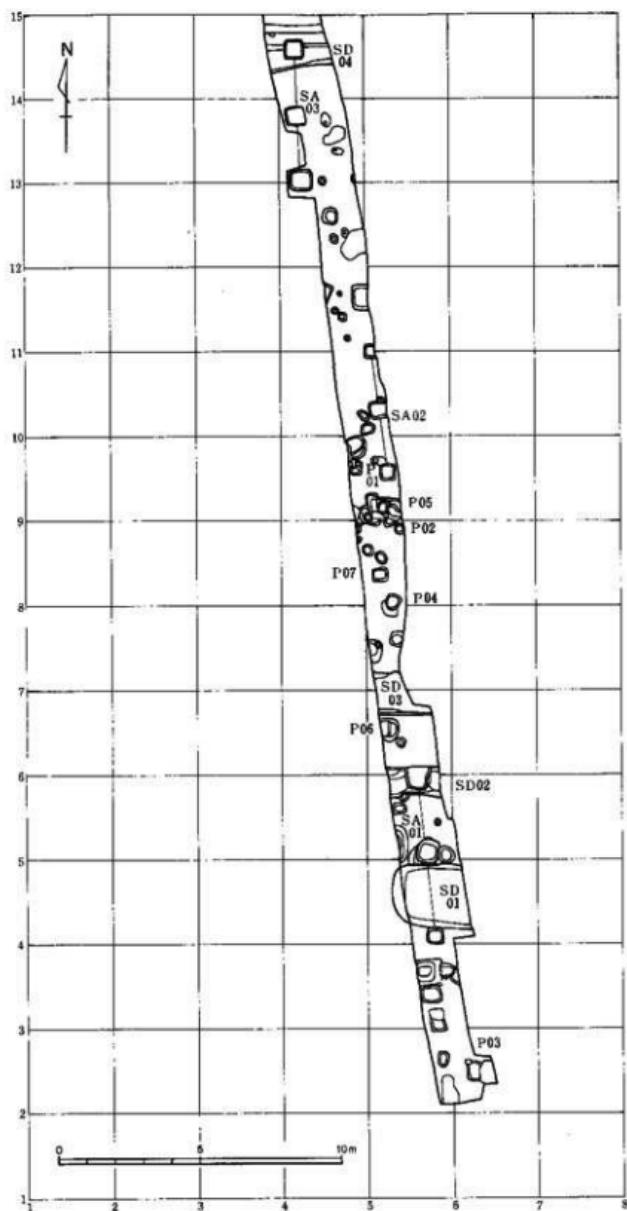
調査地区の中央部（4, 15）区で検出された。形態は不明である。規模は、南北1.60m以上、東西1.10m以上、深さ11cmを計る。東側は調査地区外となる。北側と南側は、それぞれS D06, S D05に切られている。出土遺物は、土師器、須恵器である。

S K 02

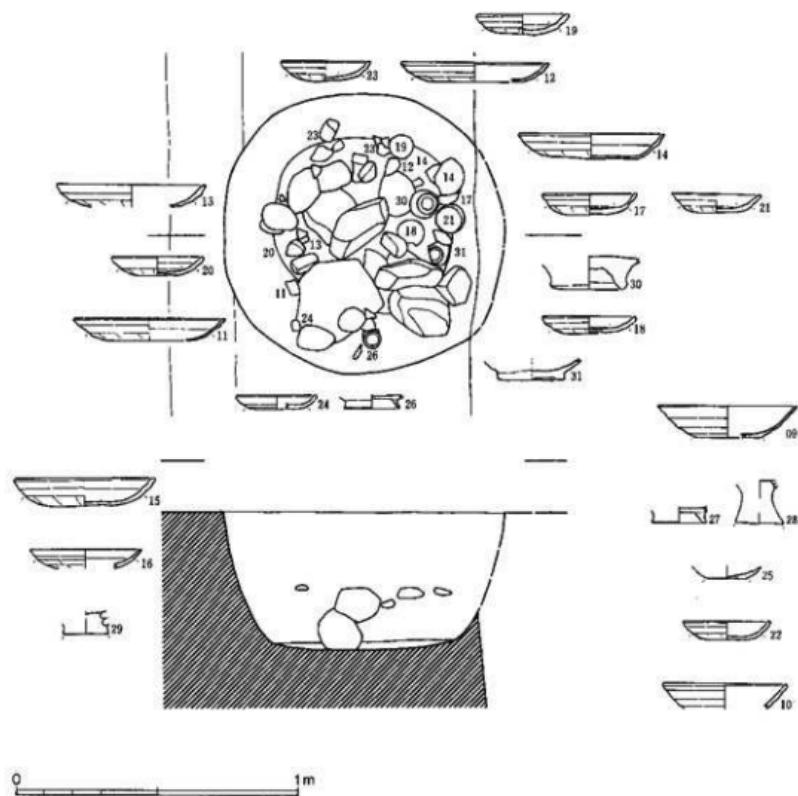
調査地区の北側（3, 23・24）区で検出された。平面形は円形で、底部は鐘鉢状になる。規模



第4図 北側造構図 (1/200)



第5図 南側造構図 (1/200)



第6図 SK02実測図 (1/20)

は、径1m、深さ55cmを計る。東側は今回の下水道工事により、一部削られている。土坑内には河原石が多数充填されており、これらと共に多数の土器類が出土した。土器類は白磁1点以外は土師器である。また土器類以外では、土錐と砥石が出土した。

このSK02実測図を第6図として示した。土器実測図は図面1で示した。第6図の土器番号は図面1に対応するが、3桁目を省略している。第6図の上段の土器は、平面図で出土位置を明示している。下段右側の6点はこの土坑の下部から出土したもので、これについては図版6-3を参照されたい。また下段左側の3点は上部から出土したものである。

3. 溝

S D 01

東西に走る溝である。調査地区の南部（5・6・4）区で検出された。横断面はU字形である。規模は、長さ2.60m以上、幅2.13～2.20m、深さ31～37cmを計る。東側は調査地区外となる。S A01と重複するが、新旧は不明である。出土遺物は、土師器、須恵器、瓦である。

S D 02

東西に走る溝である。調査地区の南部（5・5・6）区で検出された。横断面はU字形である。規模は、長さ1.80m以上、幅0.98～1.12m、深さ22～23cmを計る。東側と西側は調査地区外となる。S A01の北側掘り方と重複するが、新旧は不明である。出土遺物は、土師器、須恵器、瓦である。

S D 03

東西に走る溝である。調査地区の南部（5・6・7）区で検出された。横断面はU字形である。規模は、長さ1.80m以上、幅1.50～1.53m、深さ21～23cmを計る。東側と西側は調査地区外となる。出土遺物は、土師器、須恵器、瓦である。

S D 04

東西に走る溝である。調査地区の中央部（3・4・14）区で検出された。横断面はU字形である。規模は、長さ2.20m以上、幅0.70～1.05m、深さ11～19cmを計る。東側と西側は調査地区外となる。S A03の北側掘り方を切っている。出土遺物は、土師器、須恵器、白磁である。

S D 05

東西に走る溝である。調査地区の中央部（3・4・14・15）区で検出された。横断面は台形である。規模は、長さ2.30m以上、幅1.35～1.40m、深さ36～47cmを計る。東側と西側は調査地区外となる。S K01を切っている。出土遺物は、土師器、須恵器である。

S D 06

東西に走る溝である。調査地区の中央部（3・4・15・16）区で検出された。横断面は略台形である。規模は、長さ1.63m以上、幅0.75m以上、深さ23～36cmを計る。東側と西側は調査地区外となる。S K01を切っている。S D07と重複しており、これに切られているものと判断した。覆土は、S D07が赤褐色粘土の地山粒を主体とするものに対して、暗褐色粘質土を主体とするもので、違いが大きかった。出土遺物は、土師器、須恵器である。

S D 07

東西に走る溝である。調査地区の中央部（3・4・15・16）区で検出された。横断面は略台形である。規模は、長さ1.63m以上、幅0.75～0.90m以上、深さ25～35cmを計る。東側と西側は調査地区外となる。S D06と重複しており、これを切っているものと判断した。出土遺物は、土師器、須恵器である。

III 遺 物

1. 土 器

土器について

土師器、須恵器、白磁、中近世の陶磁器である。土師器・須恵器がほとんどで、他のものは少ない。以下、各遺構ごとに、図示したものを中心に述べる。図示したものは131が白磁である以外、土師器と須恵器である。

柵址 S A 01出土土器

図面2-101~105。須恵器の杯身と杯蓋である。杯身は無高台のものである。杯蓋は口端部が下方へ短く折れ曲がるものである。

土坑 S K 01出土土器

図面1-106~108。須恵器の杯身と杯蓋である。杯身106は高台付杯になる可能性が強い。杯身107は口縁・体部が直線的に外上方へ拡がる。底部はヘラ切りである。108は杯蓋である。

土坑 S K 02出土土器

図面1-109~131。土師器22点と白磁1点(131)である。土師器は器形的には、椀2点(109~110)と皿20点(111~130)に区分される。成形の違いにより、ロクロ土師器8点(109~110, 125~130)と非ロクロ土師器14点(111~124)に区分される。個別的には以下のとおりである。

1. ロクロ土師器椀2点(109~110)。109は口径14.6cm, 110は口径13.2cmである。
2. 非ロクロ土師器皿14点(111~124)。平底気味の底部より、口縁部はやや内弯して外上方へ拡がる。口縁部は横ナデ、底部はナデ。口縁部の横ナデは2段のものであるが、120, 124は上段が明確ではなく、下段の横ナデは強いが、上方は丸くなつて口端部へ移行する。法量より、口径14.6~15.8cmの大型品(111~115)と口径9.3~9.9cmの小型品(117~123)に区分される。ただし、口径11.6cmと中間の値を示す116や、口径8.2cmとより小型品の124も存在する。
3. ロクロ土師器皿A1点(125)。全体の形態は不明であるが、無高台の皿とした。椀になる可能性もある。全体に磨滅している。このため底部に想定される糸切りは確認できない。
4. ロクロ土師器皿B2点(126~127)。全体の形態は不明であるが、高台付の皿とした。椀になる可能性もある。底部外面は横ナデをしており、糸切りは確認できない。
5. ロクロ土師器皿C2点(128~129)。柱状高台の皿である。底部は糸切りである。高台部が高い128とやや低い129である。
6. ロクロ土師器皿・鉢1点(130)。一応ロクロ土師器としたが、明確ではない。大型の皿乃至鉢の底部である。器壁が極めて厚い。

溝S D01出土土器

図面2-132~138、図面3-139~160、図面4-161~181の50点である。

〔土師器〕

図面2-132~138の7点で椀(132~135)と甕(136~138)である。

4点の椀は口径14.6~18.8cmを計る大型品である。赤彩や黒色化がなされている。

132. 口径16.5cm、器高5.0cm。平底気味の底部より、体部は内弯して、口縁部は直線的に外上方へ拡がる。全面赤彩されている。内面はヘラ磨き、外面も全体的に磨かれている。口縁部が少量欠損している。

133. 口径15.4cm、器高4.7cm。平底気味の底部より、口縁・体部は内弯して延び、口端部は外反して外上方へ拡がる。内面と口縁部外面が黒色化されている。体・底部外面が赤彩されている。全体的に平滑である。口縁部3分の2と底部が少量欠損している。

134. 口径14.6cm、器高4.5cm。平底気味の底部より、口縁・体部は内弯して延び、口端部は外反して直上方へ拡がる。内面と口縁部外面が黒色化されている。内面はヘラ磨き、外面は平滑である。また口端部は横ナデしている。口縁部4分の1が欠損している。

135. 口径18.8cm、器高5.9cm。平底気味の底部より、口縁・体部は内弯して延び、口端部は外反して直上方へ拡がる。内面は黒色化され、口縁・体部に放射状暗文、底部に3重の螺旋状暗文が付く。内面は平滑、外面は、口縁部がヘラ磨き・横ナデ、体部が回転ヘラ削り、底面がナデ(平滑になっている)である。2分の1残存。

3点の甕は、口縁・肩部が「く」の字状に折れる口縁部を中心とした破片である。口径は20.0cmである。口端部は横ナデされて、円線状となっている。138は肩部も残存しており、肩部外面はカキ目である。

〔須恵器〕

図面3-139~160、図面4-161~181の43点である。

杯A 無高台の杯身で、139~147の9点である。法量は、口径12.6~13.5cm、器高3.3~4.2cmとまとまった大きさとなっている。底部はヘラ切りされている。内面に仕上げナデが確認できるものは147のみである。

杯B 高台付の杯身で、148~160の13点である。この内157~160の4点は休下・底部片である。残りの9点で口径をみると、口径12.4~16.4cmと幅がある。中心は150~155の口径13.4~14.5cmである。またこれらの器高は3.9~4.5cmと一定の幅でおさまっている。148は口径16.4cmを計る大型品であると共に、器高5.9cmを計り高さによる器種分化を示している。なおこの杯は外面に沈線が付く。底部の切離し手法については、ほとんどのものはヘラ切り痕となっているが、153はヘラ削りされている。また154はナデが施されている。内面の調整手法については、153.157には仕上げナデが認められる。

杯X 161~164は杯身の口縁・体部片である。全体の形態は不明である。

蓋 高台付の杯身である杯Bと組み合う蓋とされているもので、165～181の17点である。天井部やつまみ部が残存しないものや、つまみ部を復元したものやそうでないものもあるが、すべてつまみ付の蓋と判断される。法量は、口径14.6～18.6cm、器高1.5～3.7cmを計る。口径の点からは、15cm前後のものと、17cm前後以上を計る大型のものとに区分される。口縁部の形態からは次のように3区分される。①天井部から口縁部へそのまま移行し口端部が下方へ短く折れる。167.169～173.176.178。②口縁部が屈曲して外方へやや延びた後、口端部が下方へ短く折れる。166。③天井部から口縁部へそのまま移行し、口端部は内方へ巻き込むようにして終わる。165.168.177。天井部内面の調整手法では、仕上げナデが認められるものは9点である。天井部外表面の調整手法では、ヘラ削りを施すものが多い。また2次的使用法として、174.175は内面が研磨されており、硯として利用されていたものである。

溝SD03出土土器

図面5－182～199の18点である。

〔土師器〕

182～185の4点で、杯3点と甕1点である。杯の182と183は類似したものである。口径は17.3cmと17.8cmを計る。半球形の形態で、底部外面を回転ヘラ削りしている。183の外面上には赤彩の痕跡が認められる。184はこの2者に対して小型の製品で、口径13.7cmを計る。体・底部外面はナデで平滑になっている。甕の185は外反して外上方へ開く口縁部である。口径27.0cmを計る。

〔須恵器〕

186～199の14点である。

杯A 無高台の杯身で、186.187の2点である。

杯B 高台付の杯身で、188～190の3点である。高台部は外方へ踏ん張る形となっている。なお、191は口縁部片で、無高台か高台付かは不明である。

蓋A 無高台の杯身である杯Aと組み合う蓋とされているもので、192～195の4点である。口端部内面にかえりが付く。192は天井部が下方へ落ち込んでいる。天井部内面には仕上げナデが付く。その他の3点は、かえりが口端部より下方へ突出しない。

蓋B 高台付の杯身である杯Bと組み合う蓋とされているもので、196～199の4点である。

196は口端部が外下方へ短く折れるものである。天井部は内面に仕上げナデ、外面上にヘラ削りが認められる。これに対して197～199の3点は口端部は通有のもので、下方へ短く折れるものである。

溝SD04出土土器

図面6－200の1点である。土師器梶の底部で、糸切り痕が付く。

溝SD05出土土器

図面6－201～206の6点である。201.202は土師器柱状高台皿である。底部は糸切りである。

203は土師器の高台部である。大型の椀ないし鉢の一部と推定される。204～206は、須恵器杯身の杯部と底・高台部片である。206の底部内面には仕上げナデが認められる。

溝S D08出土土器

図面6－207～208の2点である。須恵器杯身の無高台底部である207と須恵器杯身の高台付底部である208である。

ピットP01出土土器

図面6－209である。土師器椀の底部で、糸切り痕が付く。

ピットP02出土土器

図面6－210である。土師器皿である。非クロクロの製品で、口縁部は2段の横ナデである。

ピットP03出土土器

図面6－211～213の3点である。須恵器の無高台の杯身である211.212と杯蓋の213である。

ピットP04出土土器

図面6－214～216の3点である。須恵器の杯蓋である。

ピットP05出土土器

図面6－217である。須恵器の杯蓋である。

ピットP06出土土器

図面6－218である。須恵器の杯蓋である。

ピットP07出土土器

図面6－219である。須恵器の杯蓋である。

表土出土土器

図面7－220～240の21点である。220～224はロクロ土師器である。220は高台付杯、221は内黒の椀、222～224は柱状高台の皿である。225～240は須恵器の杯身と杯蓋である。

2. 瓦

瓦の分類

越中国府関連遺跡出土瓦は、以下のように2つに大別できる。

1. 御亭角タイプ；越中国庁跡推定地の南側に「御亭角廃寺」の存在が想定されている。この所用瓦とされているものである。時代的には7世紀中葉以降、白鳳時代に比定されている。

2. 国分寺タイプ；越中国分寺所用瓦とされているものである。時代的には8世紀中葉～後葉に比定されている。

今回の調査では、この両方のタイプの瓦が出土している。

御亭角タイプ軒平瓦

このタイプの軒平瓦はすべて重弧文軒平瓦で、4重弧文を中心に、3重弧文と5重弧文の可能性が高いものが知られていた。今回出土した3点（図面8-301～303）はすべて5重弧文である。

今回の3点は、すべてSD01から出土したもので、類似している。瓦当面は、凹面側がナデ、凸面側がヘラ削りにより面取りされている。側縁側は凹・凸面側ともヘラ削りによる面取りである。凹面は布目、凸面は繩の叩き目の後、ナデ乃至ヘラ状具によるナデである。全体的にナデで清されており、繩目は痕跡程度に確認できるに過ぎない。焼成は良好だが、還元が不十分なため、色調は赤灰色を呈する。

御亭角タイプ丸瓦

図版16-2で1点のみ示した。

御亭角タイプ平瓦

図面8-304と図面9-305～312である。304はSD03から出土したもので、今回のものでは一番良好な破片である。凹面はヘラ削りしており、布目を残さない。凸面は叩き目である。側縁は大きくて2面となっているが、一部3面の所もある。

このタイプの平瓦は凸面の叩き目から3つに分類されている。

A類、叩き板の側縁に平行、直行する格子。

B類、叩き板の側縁に斜行する格子。

O類、叩き目のないもの。

図示したものでは、A類が304～308、B類が309、O類が310～312となる。

国分寺タイプ平瓦

図版18で示した。このタイプの特徴でもあるが、軟質なため拓本で明示することができます、写真のみとした。

その他の瓦

軒丸瓦1点と国分寺タイプ丸瓦が出土している。軒丸瓦は極めて残存状態が悪く、内容が不明である。国分寺タイプ丸瓦も残存状態が悪く、図面・写真を省いた。

3. その他の遺物

土製品

土錘 S K02から出土した土錘2点で、図面10-401～402である。土師質管状のものである。401は完成品、402は約2分1残存している。

石製品

砥石 S K02から出土した砥石1点で、図面10-501である。

IV 結 語

出土遺物について

〔溝S D01出土土器〕

県下における奈良時代の土器編年は、窯跡出土の須恵器を中心に進められてきた。一方集落跡等の消費地出土資料も遅ればせながらも、編年の位置付けがなされている。これらの中で当SD01出土土器を考慮する上で参考となる資料には次のようなものがあり、暦年代が与えられている。

砺波市高沢島Ⅱ遺跡出土土器；8世紀末

大島町荒畠遺跡出土土器；8世紀後葉

富山市南中田D遺跡I 1～I 2期；8世紀第3四半紀

富山市吉倉B遺跡1期；8世紀後葉

富山市吉倉B遺跡2期；8世紀末

消費地出土資料は増加しているとは言え、上記の資料を中心とした8世紀後半のものであり、8世紀前半のものは良好な資料に恵まれていない。しかし、これら8世紀後半の資料と対比することにより、SD01出土土器の下限が判明すると言える。すなわちSD01出土土器は、須恵器の杯や蓋の対比や、土師器杯が丸みをもつ点において、これらの資料より古く位置付けることができる。上限については、窯跡出土の須恵器と対比するしかないであろう。

窯跡出土の須恵器については、池野昌男氏により、以下のような、編年や暦年代が与えられている（池野1986, 1987）。

石名山窯跡出土土器；8世紀第2四半紀初め

小杉流同Na16遺跡1号窯出土土器；8世紀第2四半紀

天池2号窯跡出土土器；8世紀第2四半紀後半～第3四半紀初め

天池1号窯跡出土土器；8世紀第3四半紀初め

これらの資料と対比するに、天池2, 1号窯跡出土土器との類似点を見出せると共に、小杉流同Na16遺跡1号窯出土土器より新しい様相を示していると言える。またSD01からは国分寺タイプの瓦が出土しており、この瓦を740年代を上限と考えれば、SD01出土土器が8世紀中葉頃のものであるとしてよいであろう。

〔溝SD03出土土器〕

SD01ほど出土量は多くない。この土器は須恵器蓋において、口縁部内面にかえりが付くものとそうでないものとがあると言う特徴ある組み合わせによって、現在の研究成果から有る程度の時期が決定できるものである。また、土師器の杯はSD01出土土器と比べて丸くなり、先行するものである。出土瓦は御亭角タイプのみである。窯跡資料では平岡窯跡出土土器と類似している。ここでは消費地と言うことも考慮して、7世紀末から8世紀初め頃としておく。

〔土坑SK02出土土器〕

当SK02出土土器は、口縁部に2段の横ナデを施す非ロクロの土師器皿が主体の土器群である。このタイプの土師器皿については、畿内の影響を受けて成立したものであり、12世紀中頃のものであることが、すでに宇野隆夫氏によって指摘されている（宇野1986）。その後資料の増加と共に、古代末から中世初期の土器の変遷もより明確になってきている。最近では宮田進一氏の編年案がある（宮田1992）。以下、これらの研究を基準として、若干の考察を行ってみる。

SK02の土師器皿は、明確に2段ナデとならないものも、この指向性があり2段ナデすべてと言ってもよい内容である。この2段ナデ非ロクロ土師器皿については、断片的資料が多いが、一括遺物等まとめた資料はまだ明確ではない。しかし前後に位置する土器群と比較することにより、この土器群の位置付けを行ってみる。

2段ナデ非ロクロ土師器皿の次の時期である1段ナデの段階の土器群として以下のものがある。

小矢部市北反戻遺跡出土土器；非ロクロでは、1段ナデ面取り手法の皿が主体で、2段ナデの皿が僅かに含まれる。ロクロの椀・皿も比較的多い。

砺波市東保高池遺跡出土土器；非ロクロでは、1段ナデ面取り手法の皿のみで、2段ナデの皿はない。

北反戻遺跡、東保高池遺跡では、土師器以外に珠洲（珠洲Ⅰ期）が伴い、北反戻には白磁・青磁が、東保高池では青磁が伴っている。

先行する資料としては、小矢部市桜町遺跡舟岡地区出土土器、小矢部市八代西遺跡出土土器がある。これらの土器群はロクロ土師器のみであり、非ロクロはない。器形的には椀、皿、柱状高台皿（円柱状底部の小皿）、内黒椀、高台付椀である。この小矢部市の資料については、伊藤隆三氏により、①桜町遺跡舟岡地区、②八代西遺跡、③北反戻遺跡、④桜町遺跡坂東地区（非ロクロのみ、珠洲Ⅱ期）の順で変遷する編年がなされている（伊藤他1990）。

今回以外の越中国府関連遺跡出土資料には、小矢部市の桜町遺跡舟岡地区や八代西遺跡に平行する段階の資料もあり、当SK02と同様な2段ナデ非ロクロ土師器皿も存在する。しかし、1段ナデ非ロクロ土師器皿に代表される北反戻遺跡や東保高池遺跡に該当する資料が極めて少ない。

非ロクロ土師器皿以外の土師器の種類については、小矢部市では八代西遺跡段階で、柱状高台皿、内黒椀、高台付椀がなくなるとされている。SK02の場合、内黒椀はないが、柱状高台皿、高台付皿（椀）が伴っている。

以上のこと考慮し、地域差を一応無視してSK02の位置付けを行うなら以下になる。

1. 桜町遺跡舟岡地区；11世紀後半
2. 八代西遺跡；12世紀初め
3. 越中国府SK02；12世紀中葉、珠洲Ⅰ期前半
4. 北反戻遺跡；12世紀後半、珠洲Ⅰ期後半
5. 東保高池遺跡；12世紀後葉、珠洲Ⅰ期後半

【御亭角タイプ瓦】

御亭角タイプ瓦では、軒丸瓦として2種類の蓮華文軒丸瓦があり、軒平瓦として数種類の重弧文軒平瓦が知られていた。今回出土の軒平瓦により、5重弧文軒平瓦の存在が確定になった。これらの軒平瓦は、重弧文の数や、無額か段額かの違い、額部の施文の有無等により、現在確認できるのは以下の4種類である。

- A. 3重弧文無額施文形式
- B. 4重弧文段額施文形式
- C. 4重弧文段額形式（Bに比べて額が小さい、施文の有無は不明）
- D. 5重弧文無額無文形式

今回の5重弧文軒平瓦の凸面には縄目が付く。今まで、御亭角タイプ瓦は格子目印きで、国分寺タイプ瓦は縄目印きとしていたが、このように単純に行かなくなつた。

遺構について

今回検出の遺構は、柵址、土坑、溝である。調査地区がトレンチ状に南北に細長く、東西への遺構の拡がりを確認できない。柵址とした3条の遺構については、掘立柱建物址の一部になる可能性が高い。特にS A03はしっかりした掘り方をもち、奈良時代の掘立柱建物址の可能性が極めて高い。土坑は2基であるが、S K01については一部の検出であり、明確なものはS K02である。S K02の性格については、墳墓の可能性も含めて、今後検討して行きたい。溝については、すべて東西溝である。時期については後述するようにまちまちである。

遺構の時期については、遺物等から以下のような年代観を与えておく。

溝 S D03 ; 白鳳時代末～奈良時代初め	溝 S D06 ; 平安時代
溝 S D01 ; 奈良時代中葉	溝 S D05 ; 平安時代末
柵址 S A03 ; 奈良時代	溝 S D07 ; 平安時代末
溝 S D04 ; 平安時代	土坑 S K02 ; 平安時代末

遺跡について

柵址 S A03、溝 S D01・03等は、律令期の国庁に関連する施設としてよいであろう。S A03の方形の掘り方は、規模・形態とも官衙の一部を構成する建物のものとして似つかわしい内容である。土坑 S K02や平安時代の溝は、変質した段階（王朝国家期）での国府に関するものであろう。

V 付 載

——昭和60年度勝興寺避雷針地区の調査——

はじめに

この発掘調査は、勝興寺本堂の裏（本堂の西側）に避雷針を設置することに伴うものである。位置については第2図の地図で「22」として示した所である。

避雷針設置のため2箇所を掘削する計画であったので、それぞれに試掘坑を設定した。

昭和60年11月27日に人力により掘り下げを開始した。しかし、予想以上に表土が厚く、特に北側試掘坑では疊層にもあたった。そこで作業を一旦中断した。

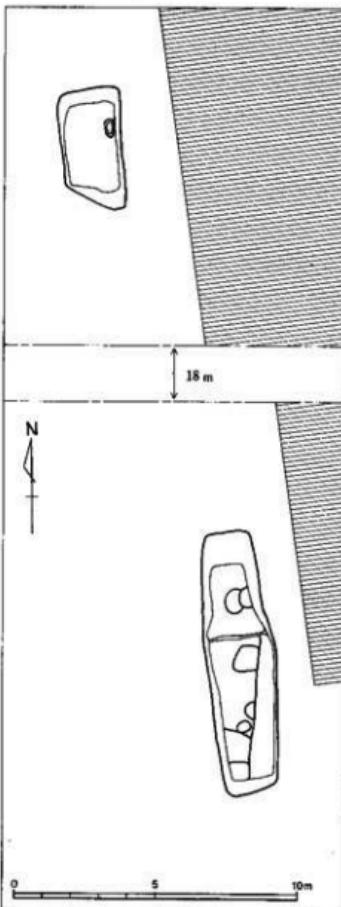
そして、12月3日に再開し、バックフォーで表土を除去し、遺構の検出等を行い、翌4日に写真撮影や図面を作成して調査を終了した。避雷針設置工事は遺構検出面の上で止めもらうことになった。

北側試掘坑

内法で、南北3.0m、東西1.8mの試掘坑である。検出遺構はピット1つである。出土遺物は土師器、須恵器、芯野で、第8図で示したものでは、601.602.605.606.610.611である。この試掘坑の土層は、20~30cmの表土層の下が疊層となり、この層が約110~130cm堆積していた。その下が黄色褐色粘土層の基盤層となっていた。

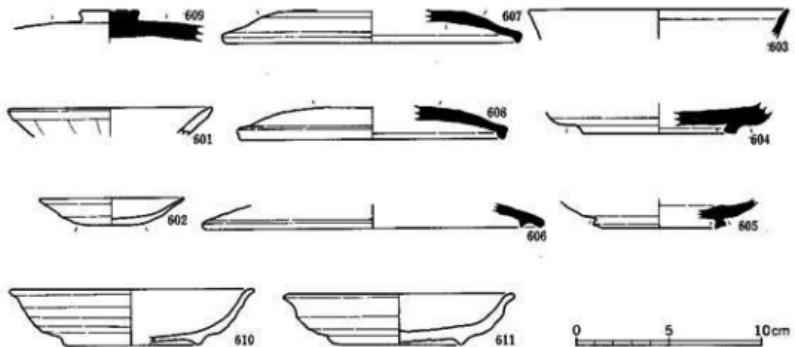
南側試掘坑

内法で、南北7.6m、東西2.2mの試掘坑である。検出遺構は、土坑状遺構、溝状遺構、掘り方状遺構である。出土遺物は土師器、須



第7図 勝興寺地区遺構図

(1/200)



第8図 勝興寺地区土器類実測図（1/1）

土師器；601～602，須恵器；603～609，志野；610～611

惠器で、第8図で示したものでは、603.604.607～609である。この試掘坑の土層は次のようにであった。第1層；表土，18～32cm，第2層；盛土，50～64cm，第3層；暗黄褐色粘質土，10～30cm，第4層；灰褐色粘質土，12～24cm，第5層；黄褐色粘土層（基盤層）。第2層の盛土層については、最近のものではなく、勝興寺の造成に関するものである可能性がある。遺構は第5層の上面で検出した。遺構は確認のみで掘り下げていない。第8図で示した須恵器はこの遺構検出時に出土したもので、一応遺構の時期を示すものと判断している。

出土遺物

出土遺物のうち、図示し得るものは第8図として示した。土師器は皿で、601が非ロクロ、602がロクロの製品である。601は口端部に煤が付着する。601が中世、602が近世の可能性が強い。須恵器は杯身と杯蓋で、603～609である。総じて奈良時代のものとしてよいであろう。志野は皿で、610と611の2点である。桃山時代～江戸時代初期のものである。

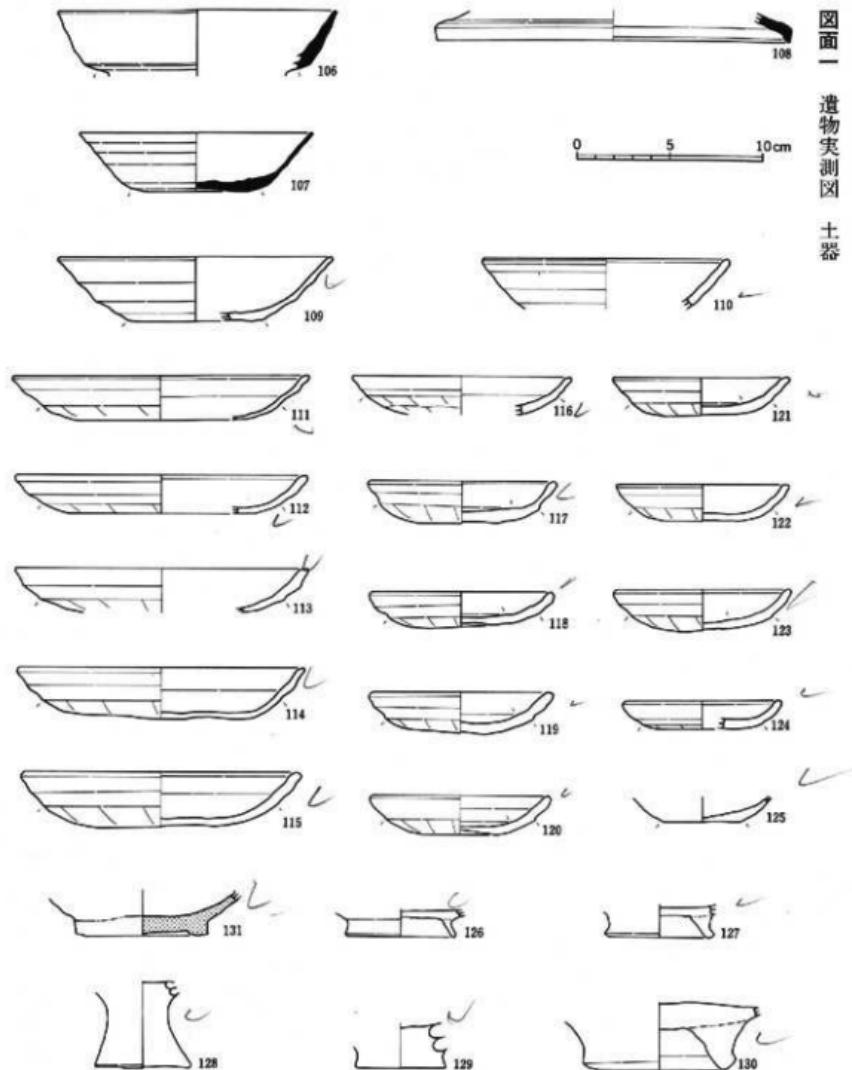
小結

この調査は避雷針設置のためのもので、2つの試掘坑を合わせて発掘面積19m²と言う狭いものであった。遺構確認面は予想より深く、盛土層等が存在したが、勝興寺の建設に関するものと理解したい。南側試掘坑検出の遺構は奈良時代頃のものと推定される。勝興寺境内は越中国跡推定地とされながらも、これまで考古学的発掘調査は実施されてこなかった。今回これを実施しかつ奈良時代頃と推定される遺構が検出されたことは、十分に成果があったといえる。また盛土層等の存在は、勝興寺境内が単純ではないことを明示していると言える。

参考文献

- 池野昌男 1986 「調査の成果」「石名山窯跡発掘調査報告」 大門町教育委員会
- 池野昌男 1987 「射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡」「大境」第11号 富山考古学会
- 伊藤隆三他 1990 「富山県小矢部市北反畠遺跡」 小矢部市教育委員会
- 宇野隆夫 1986 「越中弓庄城跡の土師器」「大境」第10号 富山考古学会
- 久々忠義 1991 「富山県大島町荒畠遺跡」 大島町教育委員会
- 神保孝造他 1978 「富山県砺波市梅塩野遺跡群予備調査概要」 砧波市教育委員会
- 西井龍儀 1983 「御亭角遺跡の瓦について」「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群
第5次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 西井龍儀他 1987 「北陸の古代寺院—その源流と古瓦」(北陸古瓦研究会編) 桂書房
- 西井龍儀 1990 「東保高池遺跡」「砺波市史資料編1」 砧波市
- 宮田進一 1992 「越中における中世土師器の編年」「中世前期の遺跡と土師器・陶磁器・漆器」
北陸中世土器研究会

図 面



土師器、須恵器、白磁

S K01; 106~108, S K02; 109~131

縮尺1/3



101



104



102

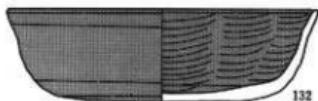


105

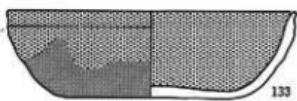


103

0 5 10cm



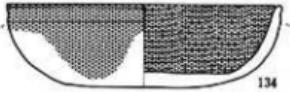
132



133



134



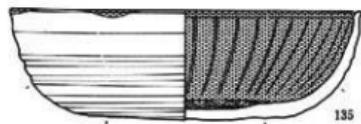
135



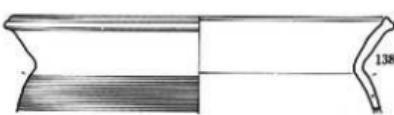
136



137



135



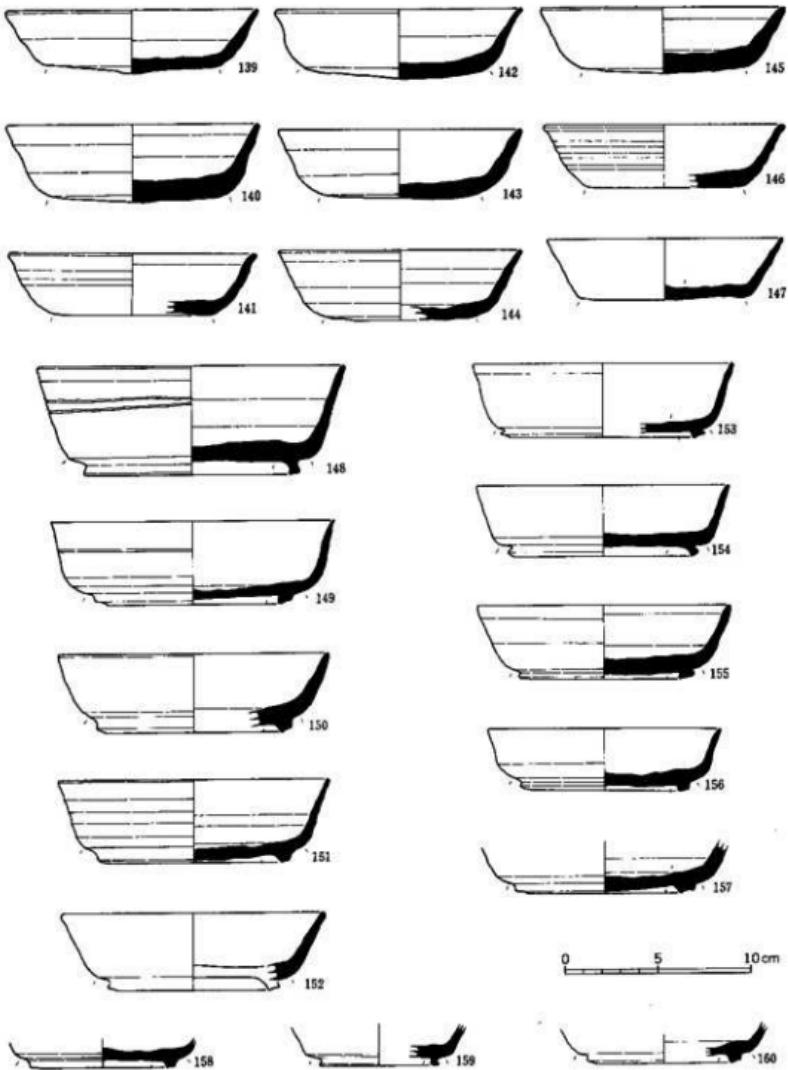
138

土器、須恵器

S A01; 101~105, S D01; 132~138

縮尺1/3

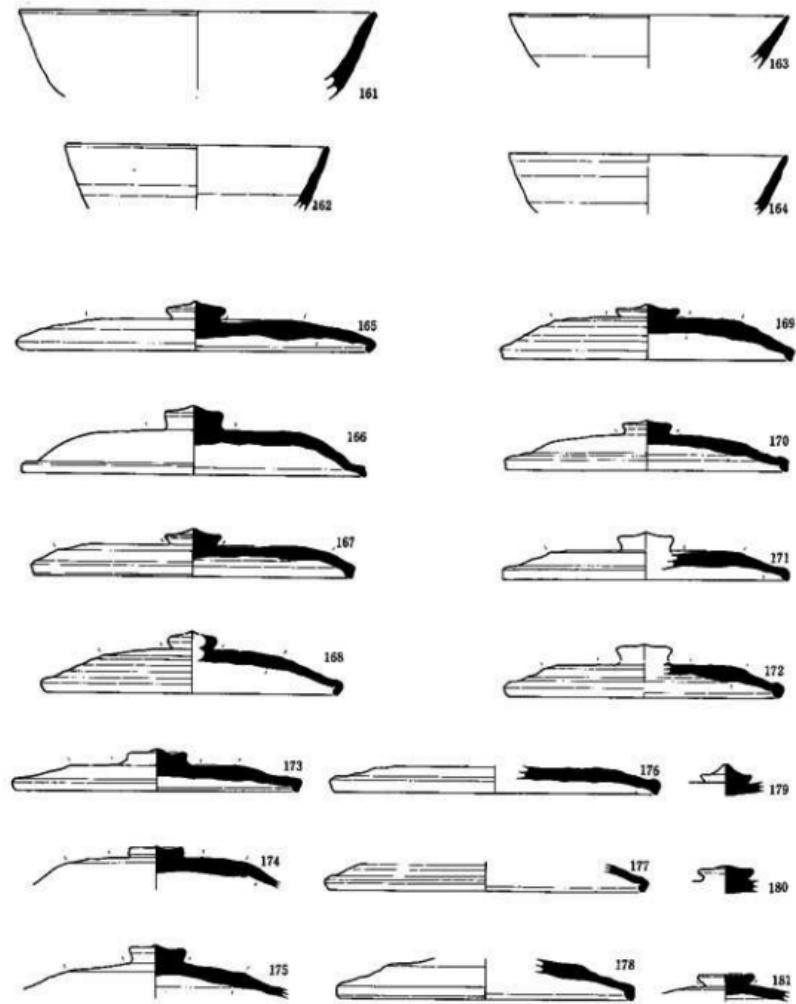
図面三 遺物実測図
土器



須恵器

S D01; 139~160

縮尺1/3



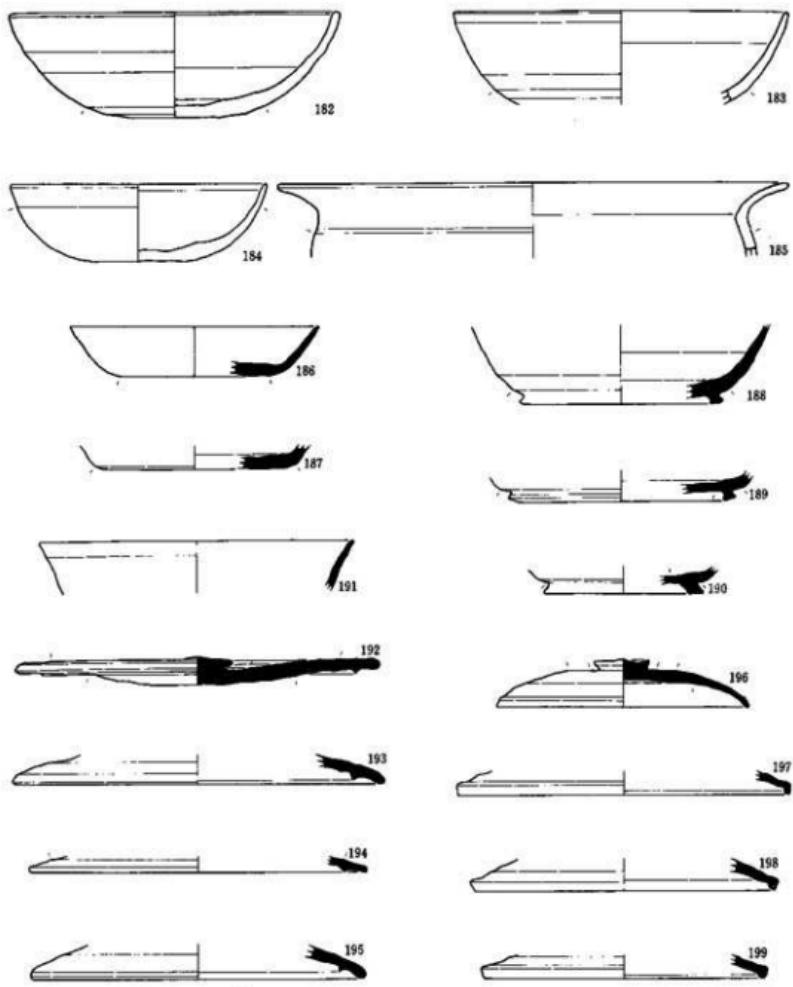
0 5 10cm

須恵器

S D01 ; 161~181

縮尺1/3

図面五
遺物実測図
土器



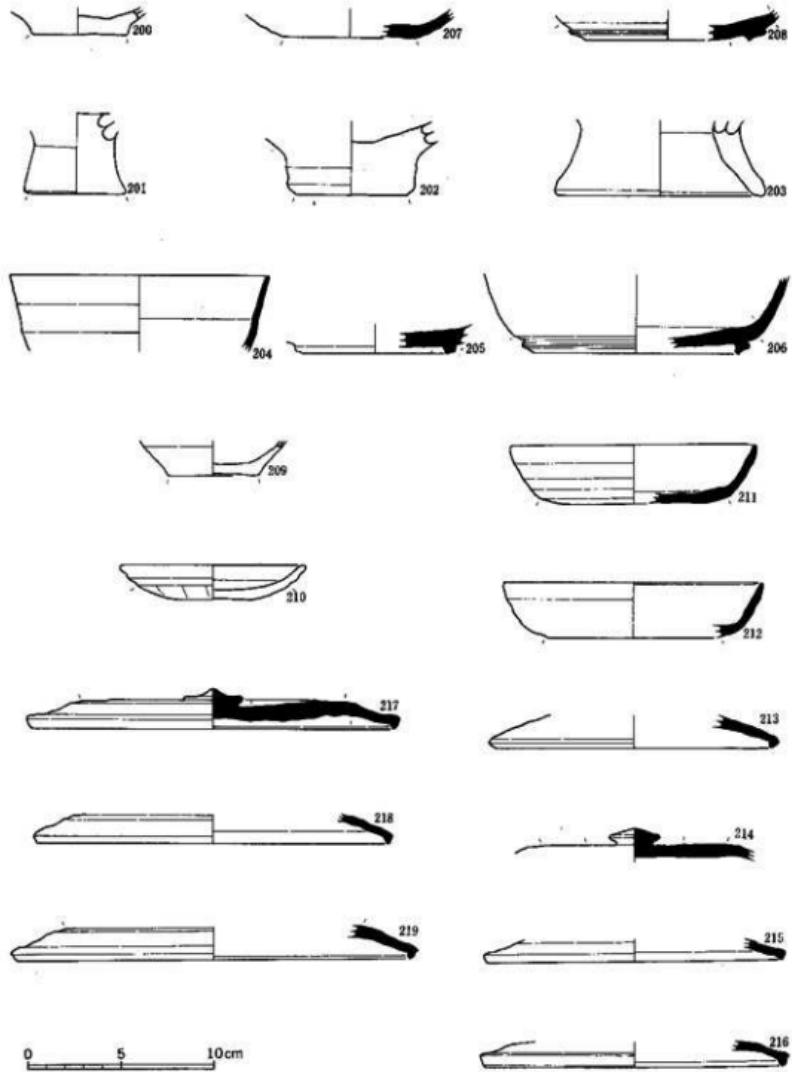
0 5 10cm

土師器、須恵器

縮尺1/3

S D 03 ; 182~199

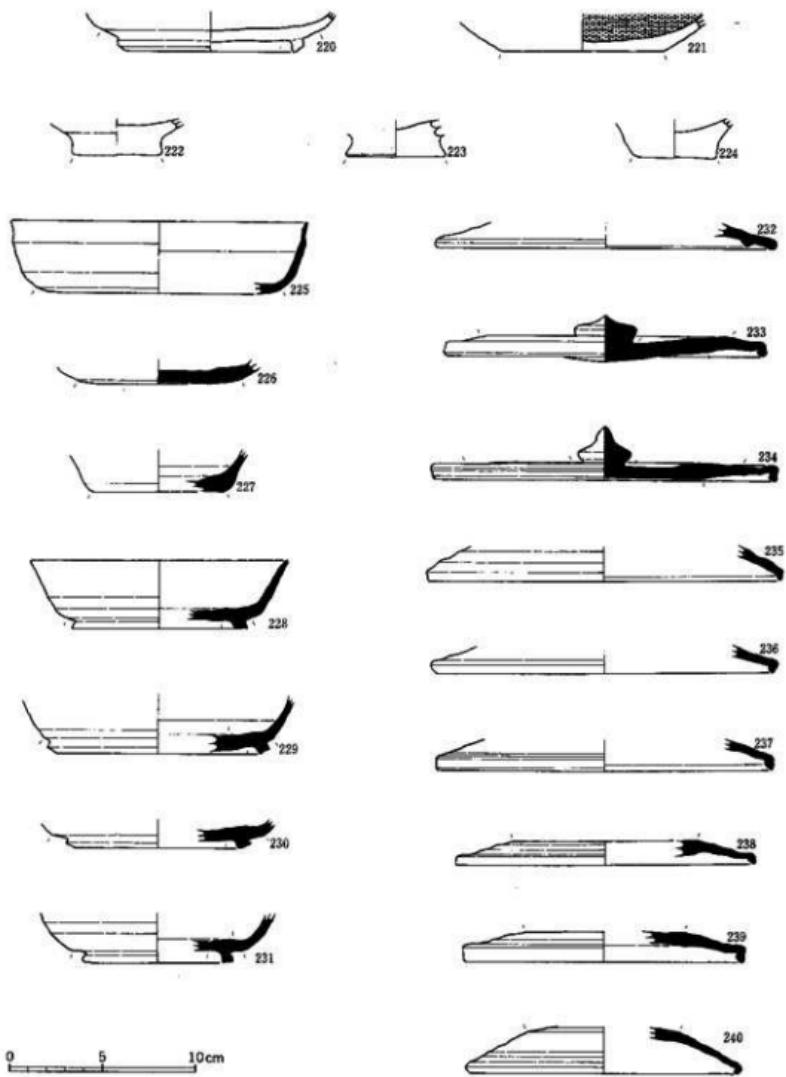
図面六
遺物実測図
土器



土器、須恵器

縮尺1/3

S D 04 ; 200, S D 05 ; 201~206, S D 06 ; 207~208, ピット ; 209~219

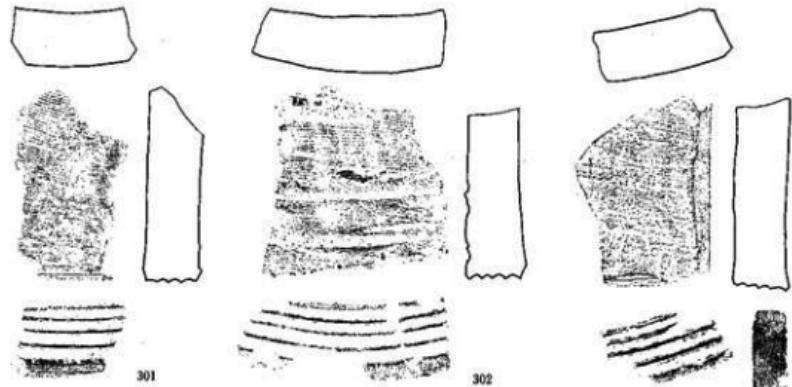


土師器、須恵器

表土 ; 220~240

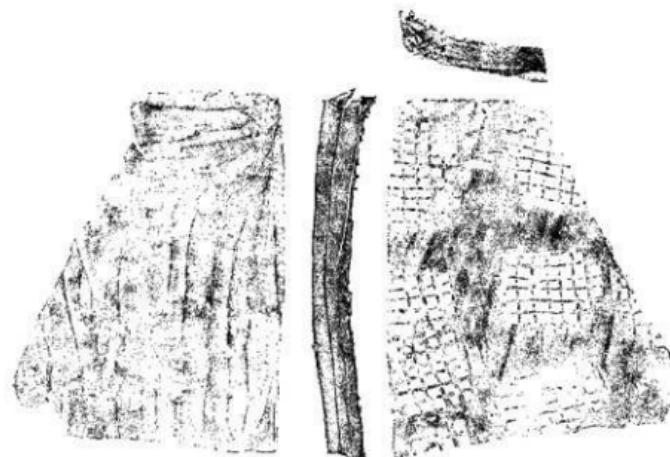
縮尺1/3

圖八 遺物実測図
瓦



0 5 10cm

303



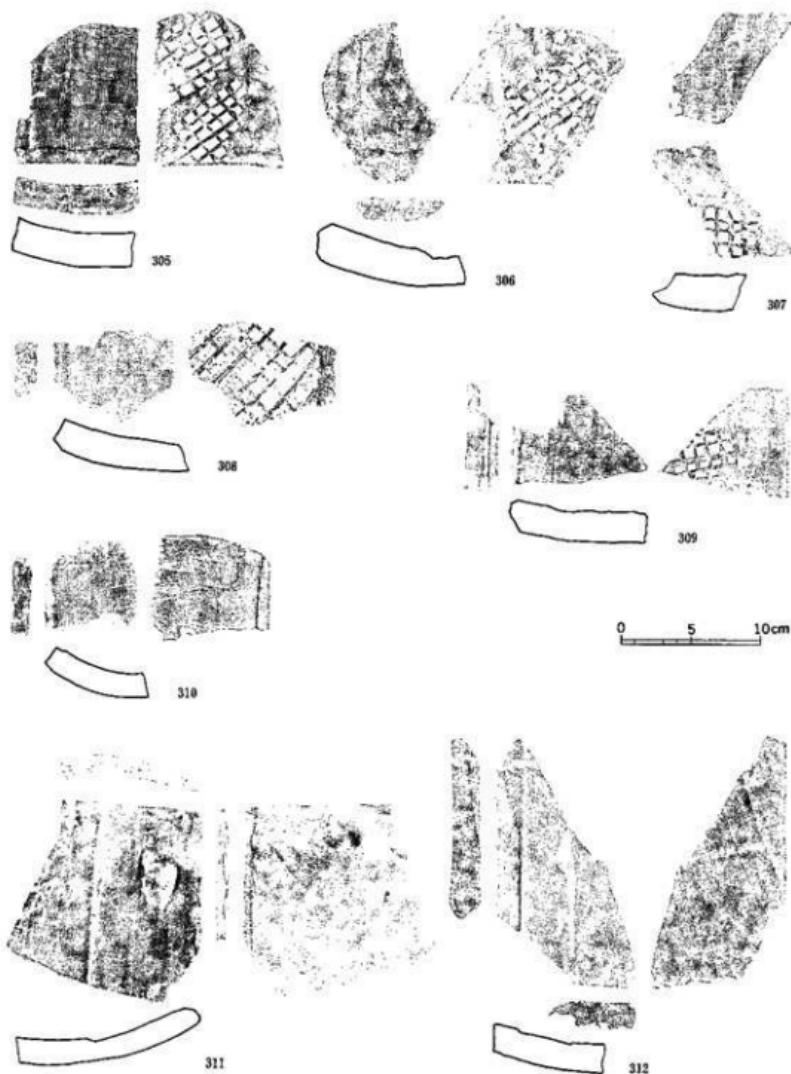
0 5 10cm

304

軒平瓦；301～303、平瓦；304

縮尺1/3、1/4

図面九 遺物実測図
瓦

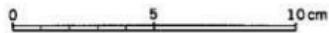
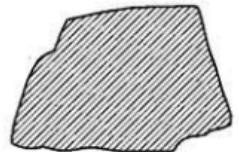
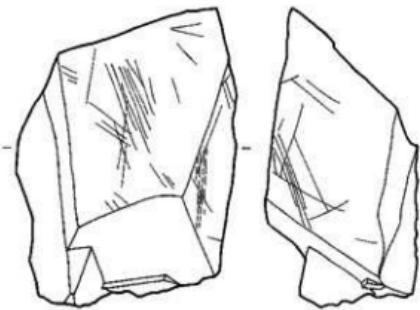
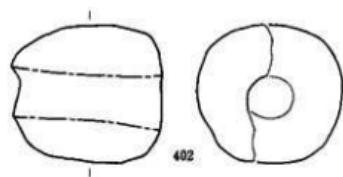
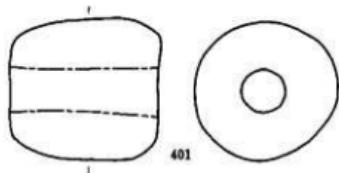


平瓦；305～312

縮尺1/4

図面一〇 遺物実測図

土製品・石製品



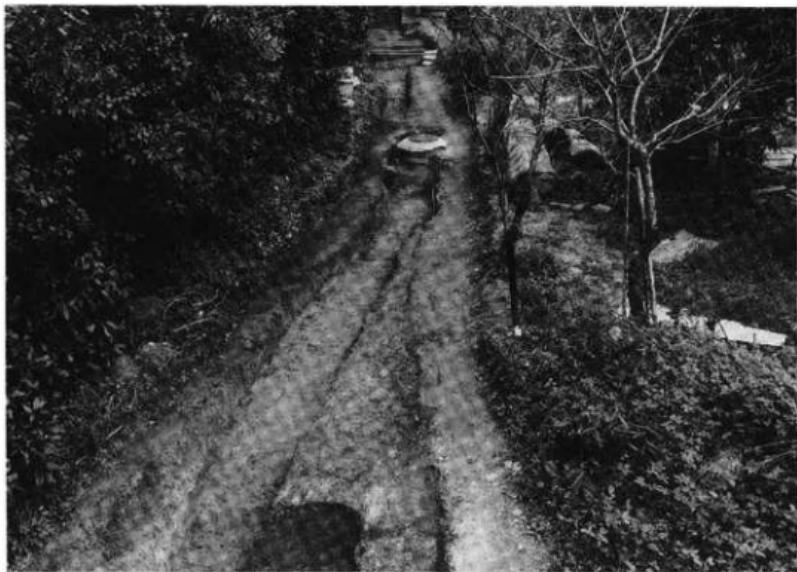
土錐；401～402、砾石；501

縮尺1/2

図 版



1. 全景（南）



2. 全景（北）



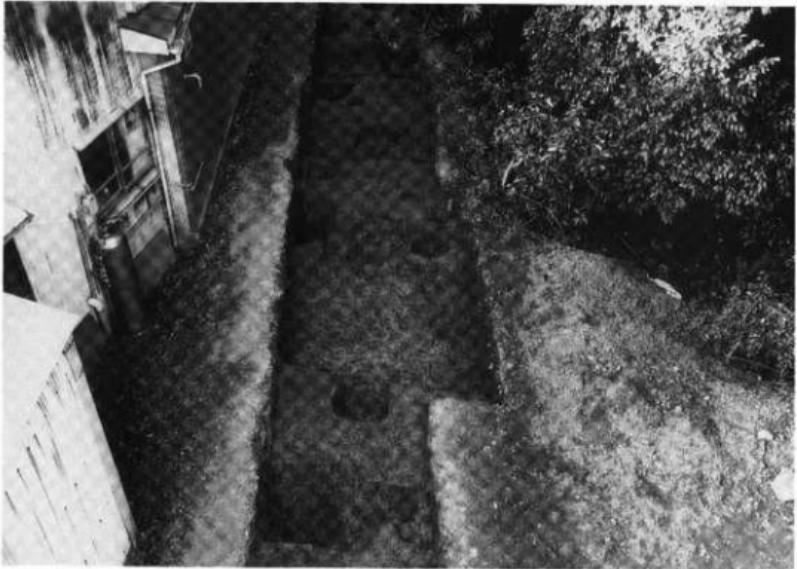
1. 北側地区全景（北）



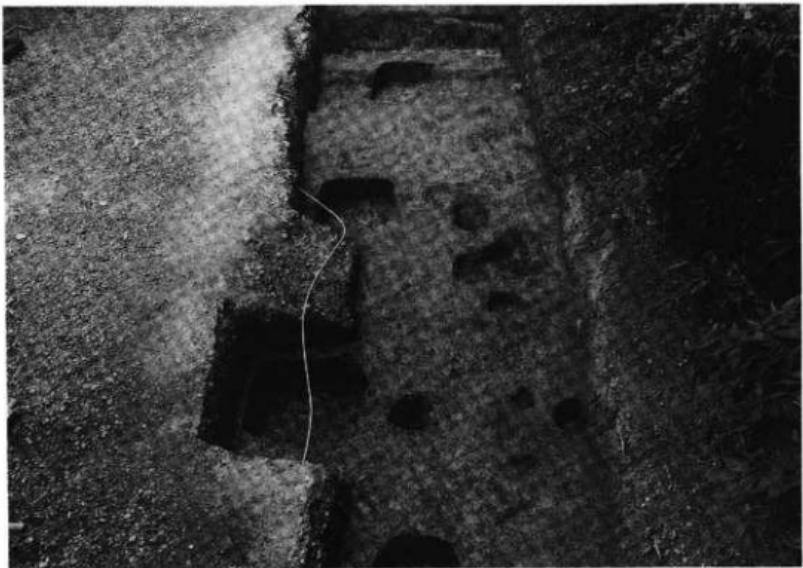
2. 南側地区全景（北）



1. SA01全景（南東）



2. SA01全景（南）



1. SA03全景（南）



2. SA03全景（北）



1. SK02遺物出土狀態全景（南西）



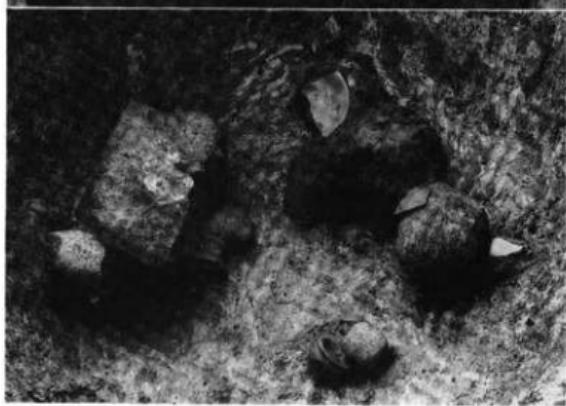
2. SK02遺物出土狀態全景（東）



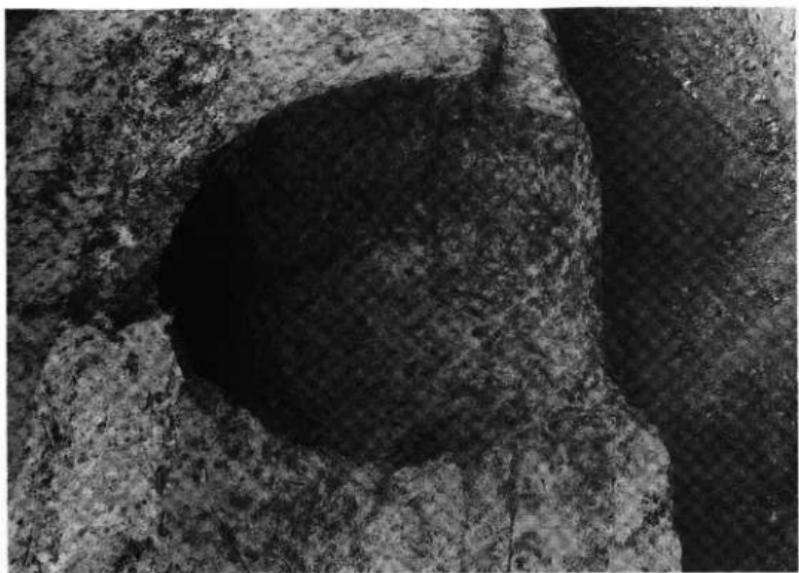
1. S K02遺物出土
狀態近景（南）



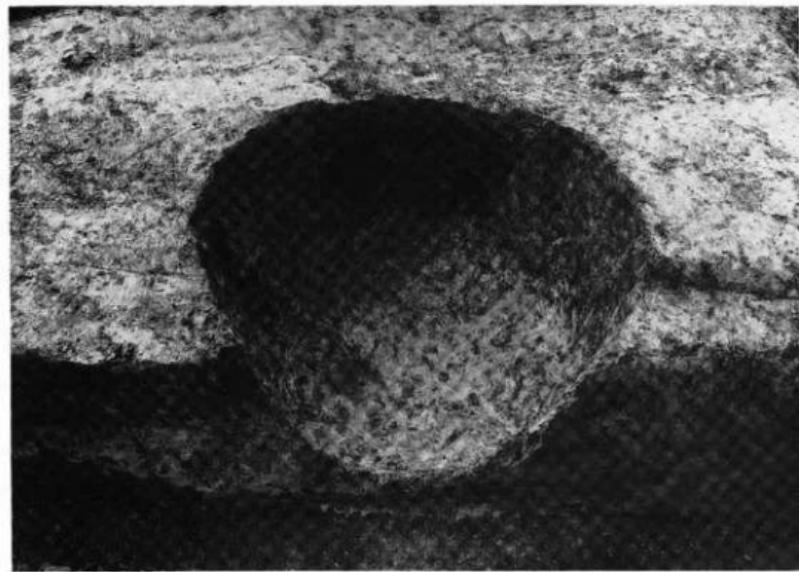
2. S K02遺物出土
狀態近景（西）



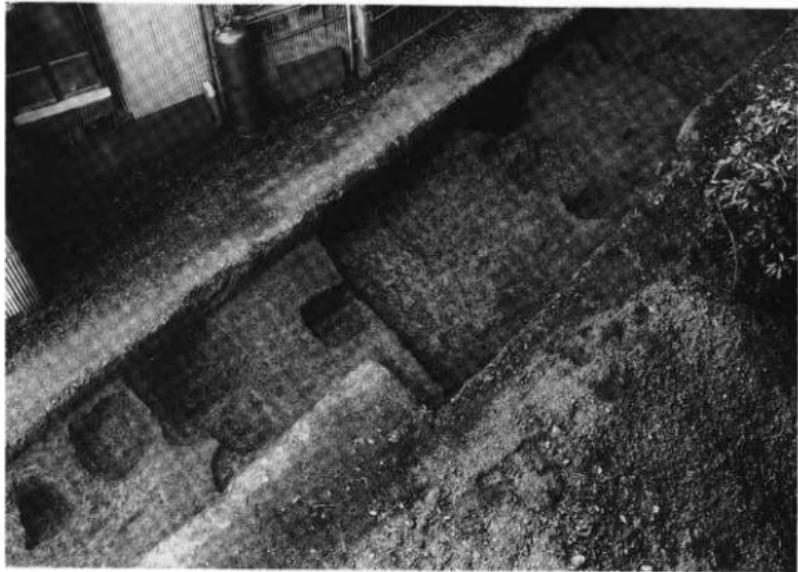
3. S K02遺物出土
狀態近景（東）



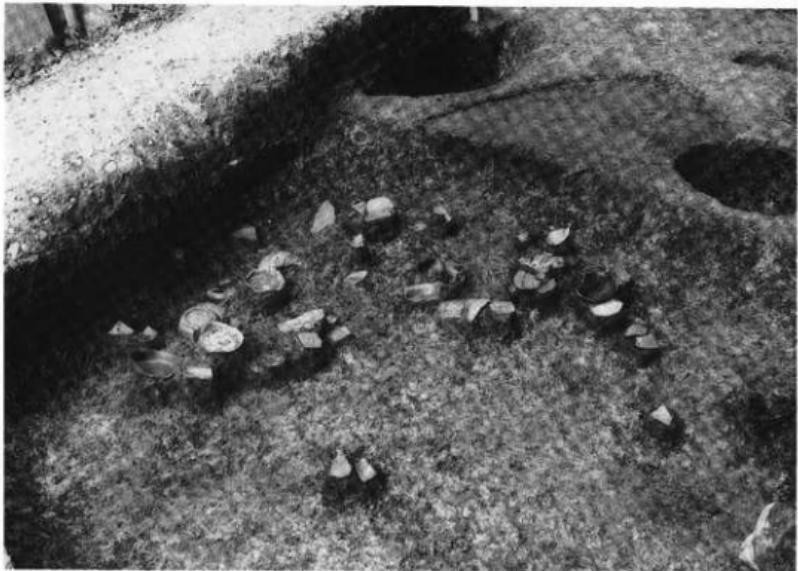
1. SK02掘り上げ状態全景（南）



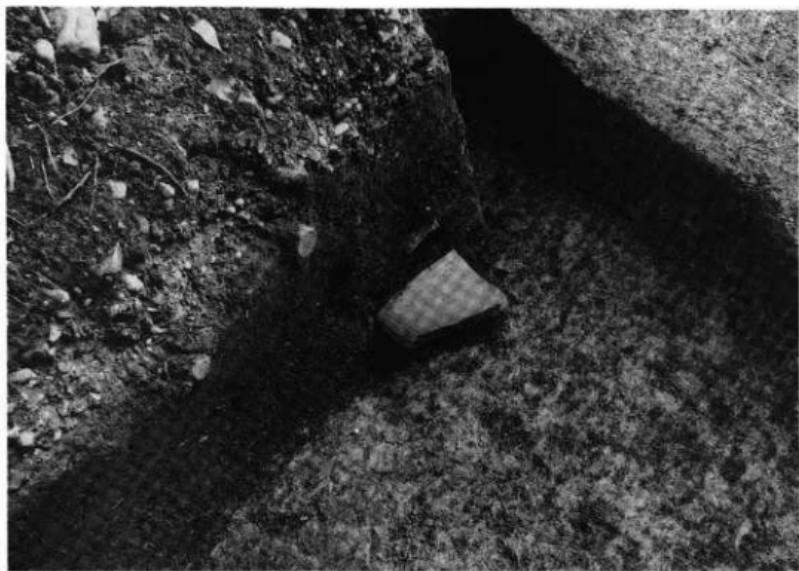
2. SK02掘り上げ状態全景（東）



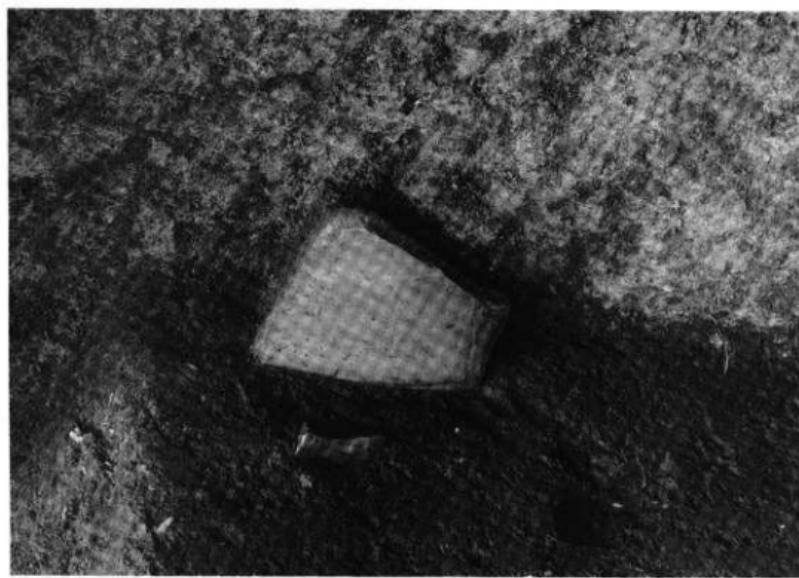
1. SD01全景（南東）



2. SD01遺物出土狀態近景（南東）



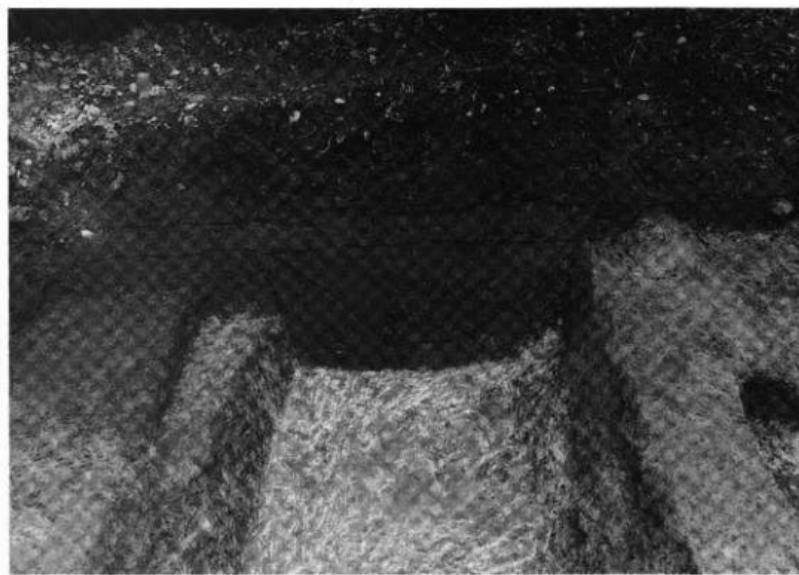
1. S D03遺物出土狀態近景（北西）



2. S D03遺物出土狀態近景（西）



1. S D04~07全景（南西）



2. S D05土層断面（西）



1. SD01付近調査風景（南東）



2. SD05調査風景（南西）



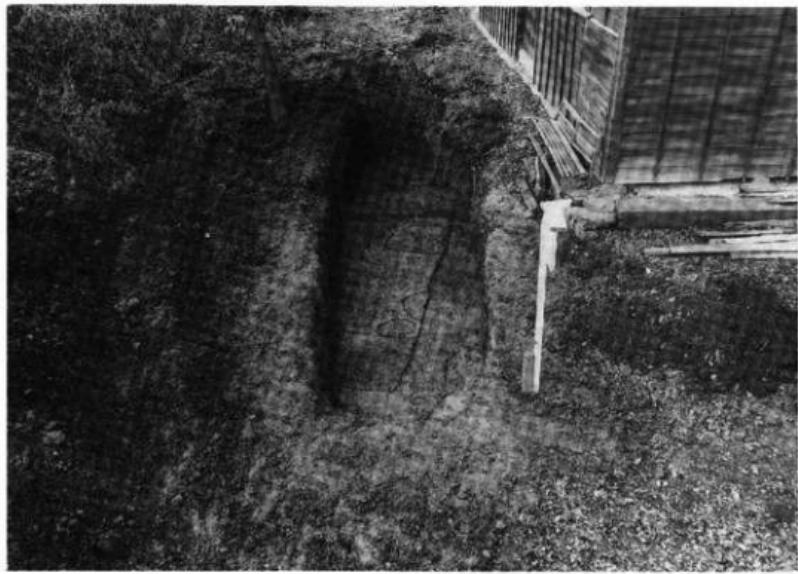
1. 勝興寺地区北側試掘坑全景（南）



2. 勝興寺地区北側試掘坑全景（西）

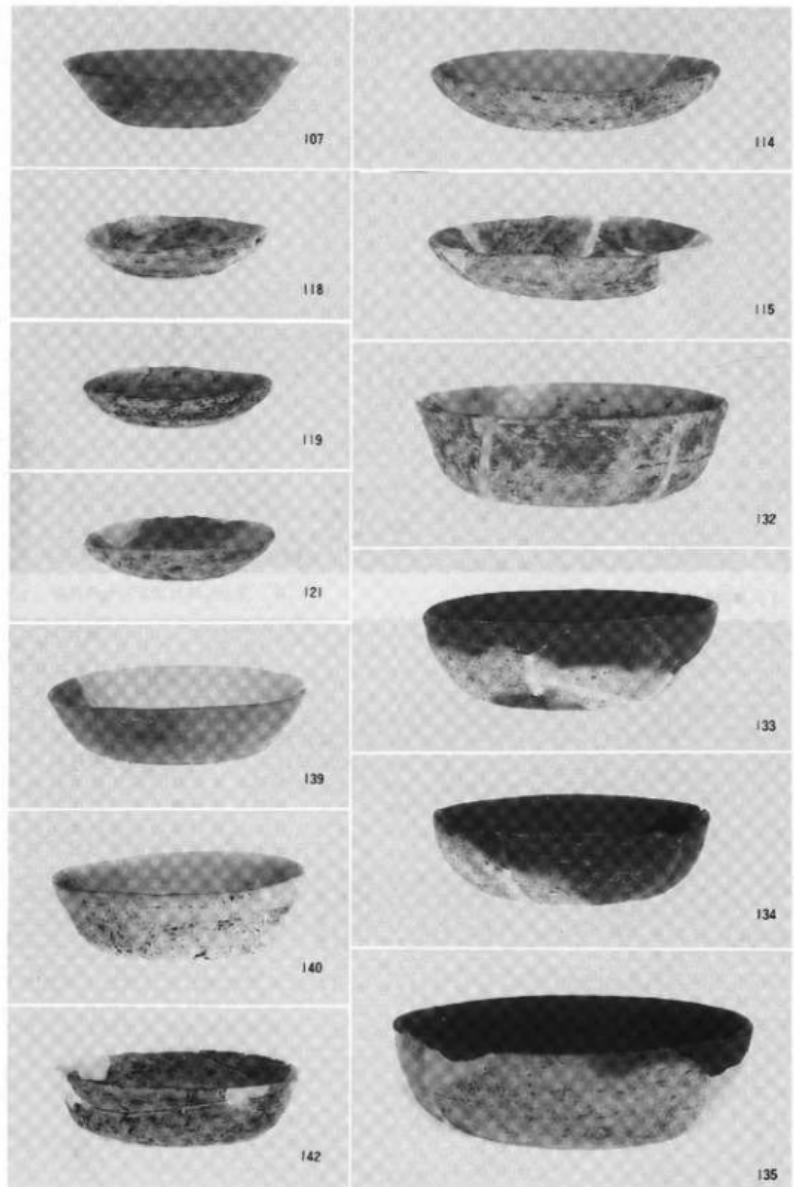


1. 勝興寺地区南側試掘坑全景（北）

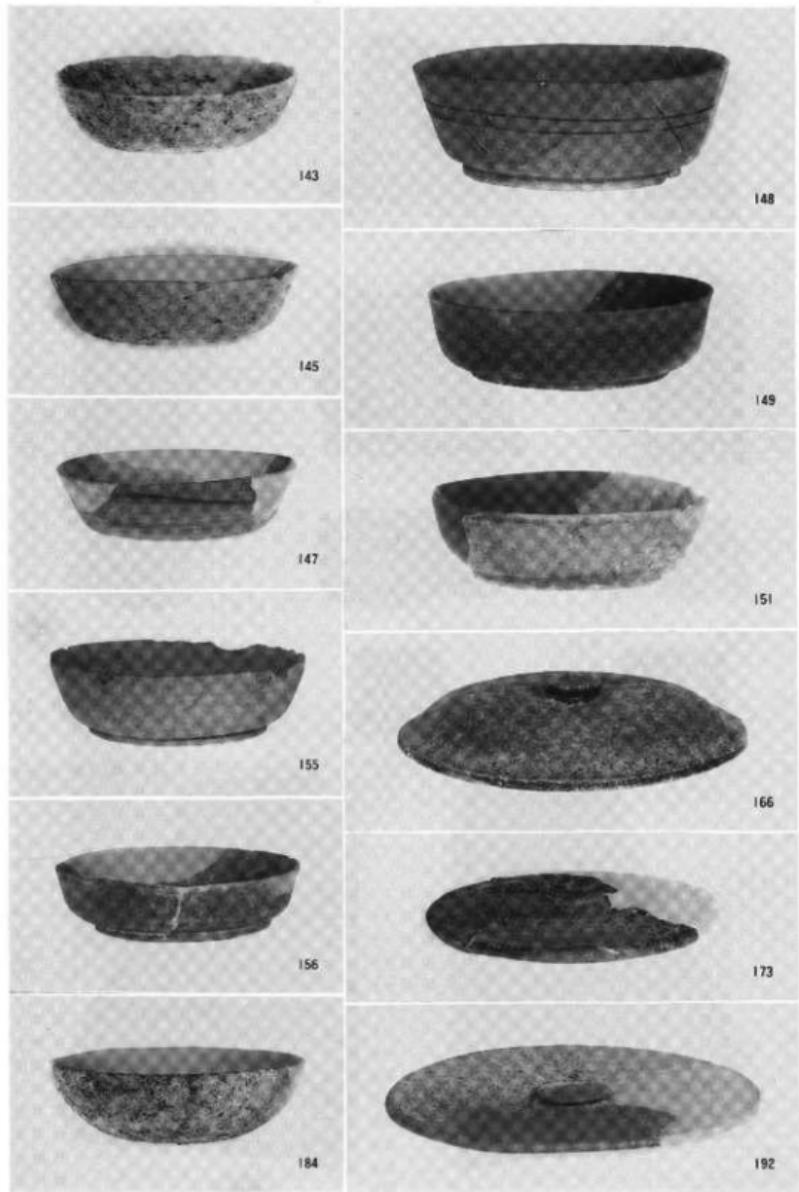


2. 勝興寺地区南側試掘坑全景（南）

圖版一四 遺物



土器

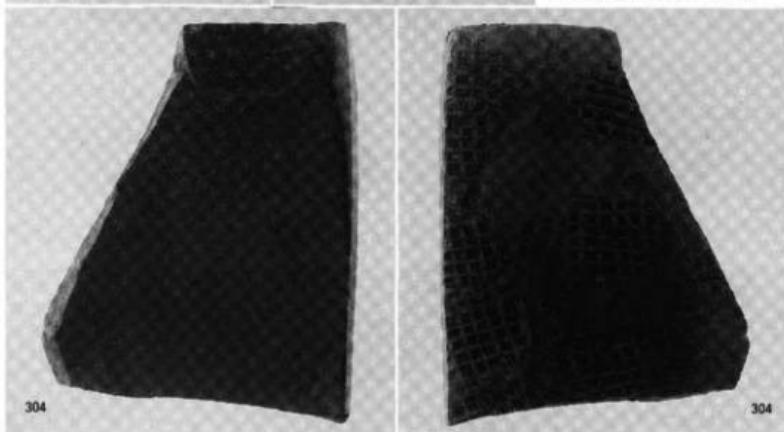


土器

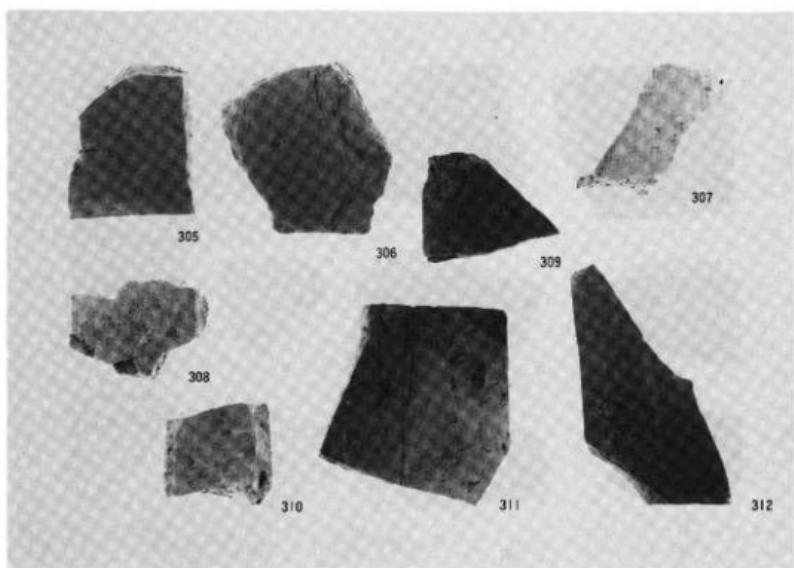


1. 軒平瓦（御亭角タイプ）

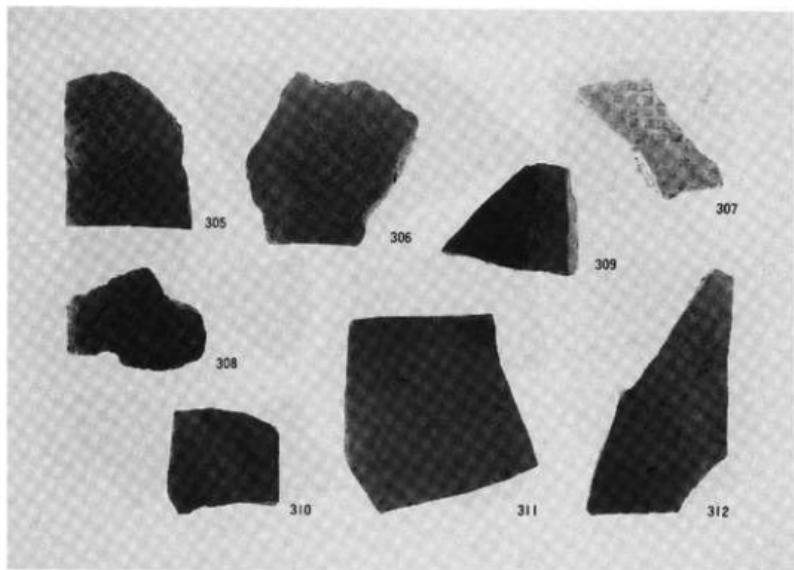
2. 丸瓦（御亭角タイプ）



3. 平瓦（御亭角タイプ）

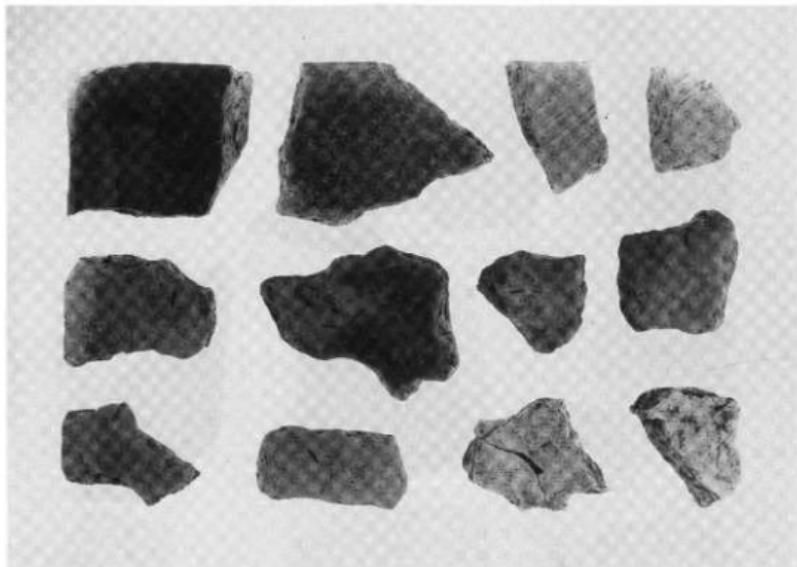


1. 平瓦凹面（御亭角タイプ）

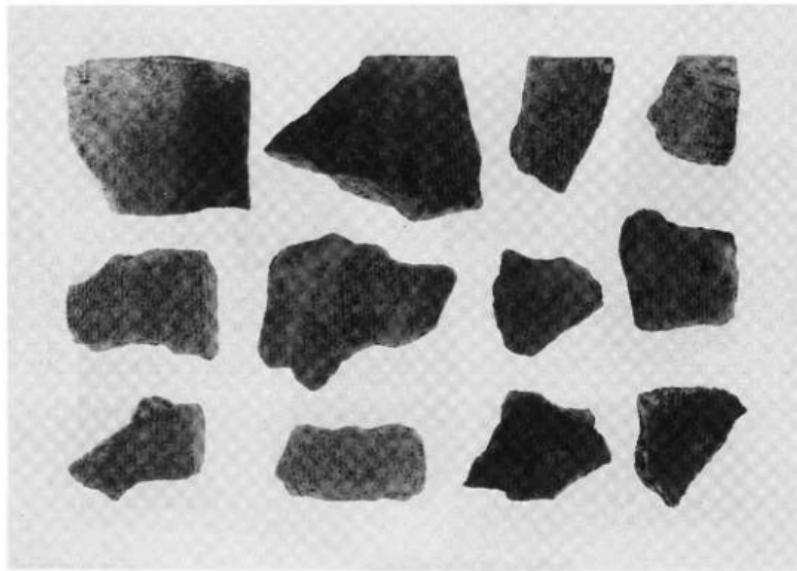


2. 平瓦凸面（御亭角タイプ）

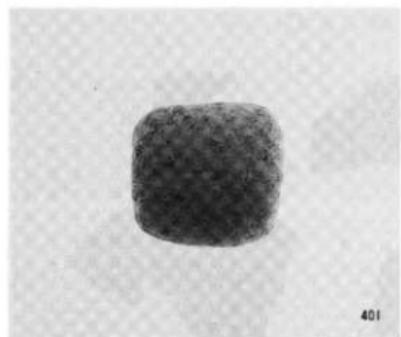
圖版一八 遺物



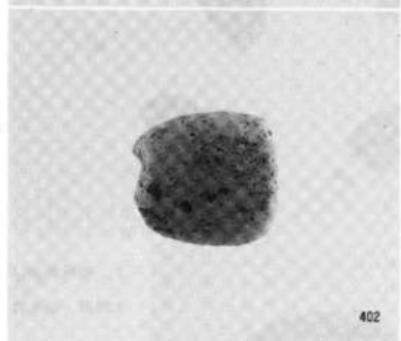
1. 平瓦凹面（国分寺タイプ）



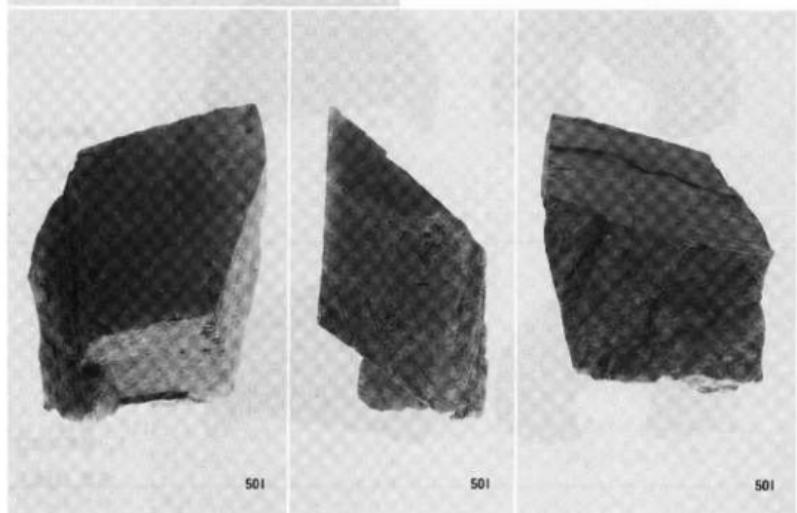
2. 平瓦凸面（国分寺タイプ）



401



402 1. 上鉢

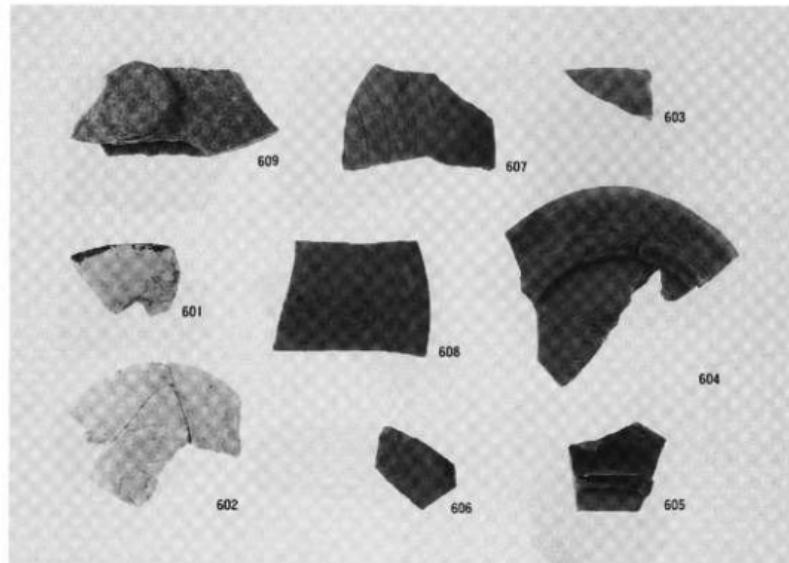


501

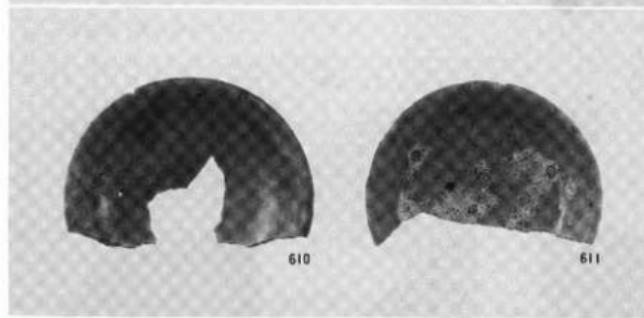
501

501

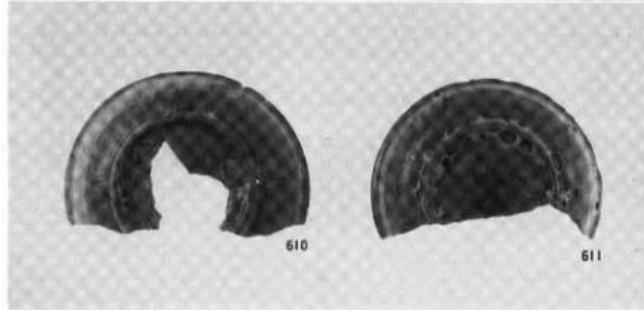
2. 磁石



1. 藤興寺地区
土師器・須恵器



2. 藤興寺地区
志野 (内面)



3. 藤興寺地区
志野 (外面)

高岡市埋蔵文化財調査概報第24冊

越中国府関連遺跡調査概報 VI

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路 7-50

1994年 3月31日

印刷所 小間印刷株式会社

富山県高岡市利根町 3
